

瀬戸山I遺跡第8次

発掘調査報告書

2023年

掛川市

例 言

- 1 本書は、令和2年度に現地調査を行い、令和3、4年度に整理調査を行った瀬戸山I遺跡第8次発掘調査の報告書である。
- 2 調査は、畑地造成に伴う緊急発掘調査で、国および県の補助金を得て、掛川市が実施した。
- 3 発掘調査に係る期間、担当は以下のとおりである。
確認調査 令和元年8月28日、29日 長井郁織
本発掘調査 令和2年6月1日～令和3年1月14日 井村広巳、鈴木優介
- 4 発掘調査及び整理調査参加者（五十音順、敬称略）
発掘調査作業員：小笠原国重、北嶋秀雄、齋藤昭、清水欽次、鈴木良晴、寺沢巧、野中きみ子、原田静雄、藤田弘、藤田房幸、藤田理恵、松浦良和、溝口玉緒、村松信夫、森川孝之、山崎シズ、山崎富士男
整理作業員：太田敏子、加藤香子、早乙女のぞみ、竹田徳子、徳川浩、中野陽子
- 5 現地調査ならびに報告書作成にあたっては、以下の方々にご教示、協力をいただいた。（五十音順、敬称略）
鈴木敏則、富樫孝志、西井幸雄、平野吾郎、松本一男、深澤麻衣
- 6 本書の執筆、編集は、井村広巳が行い、柴田慎平がこれを補佐した。
- 7 調査によって得られた資料及び出土遺物は、掛川市文化・スポーツ振興課が保管している。

凡 例

- 1 本書で用いる座標値は世界測地系に基づく。方位は座標北とし、L = 標高である。
- 2 遺構の略番号は、以下のとおりである。
SB：堅穴住居跡 SH：掘立柱建物跡 SD：溝 SA：柵
SK：土坑 SP：小穴 SX：性格不明遺構
- 3 遺構番号は、現地調査時に呼称したものをそのまま使用した。
- 4 遺物の番号は、挿図と写真図版と同一である。

目 次

例言 凡例

I はじめに	
1 調査に至る経緯	1
2 遺跡をめぐる環境	1
(1) 地理的環境	1
(2) 歴史的環境	1
II 調査の方法と経過	2
III 調査の成果	3
(1) 遺構・遺物	
① 竪穴住居跡	3
② 掘立柱建物跡と横列	12
③ 縄文時代早期	12

插图目录

第1图	周边遗址位置图	14
第2图	调查地点位置图	15
第3图	遗構全体图	17·18
第4图	SB01、05实测图	19
第5图	SB02、03实测图	20
第6图	SB04实测图	21
第7图	SB06、34、36、37实测图(1)	22
第8图	SB06、34、36、37实测图(2)	23
第9图	SB07、13实测图	24
第10图	SB08~10实测图(1)	25
第11图	SB08~10实测图(2)	26
第12图	SB11、12、16实测图(1)	27
第13图	SB11、12、16实测图(2)	28
第14图	SB14、15实测图	29
第15图	SB17、24~26实测图	30
第16图	SB18实测图	31
第17图	SB19~21实测图	32
第18图	SB22、23实测图	33
第19图	SB28实测图	34
第20图	SB29~31实测图(1)	35
第21图	SB29~31实测图(2)	36
第22图	SB32、33实测图	37
第23图	SB35实测图	38
第24图	SB38实测图	39
第25图	SB39~41实测图	40
第26图	SB42实测图	41
第27图	SB43实测图	42
第28图	SB44、45实测图(1)	43
第29图	SB44、45实测图(2)	44
第30图	SB46、47实测图	45
第31图	SB48、49实测图	46
第32图	SH01实测图	47
第33图	SH02实测图	48
第34图	SH03实测图	49
第35图	SH04实测图	50
第36图	SH05实测图	51
第37图	SA01实测图	52

第38回	出土遺物実測図 (1)	53
第39回	出土遺物実測図 (2)	54
第40回	出土遺物実測図 (3)	55
第41回	出土遺物実測図 (4)	56
第42回	出土遺物実測図 (5)	57
第43回	出土遺物実測図 (6)	58
第44回	出土遺物実測図 (7)	59
第45回	出土遺物実測図 (8)	60
第46回	出土遺物実測図 (9)	61
第47回	出土遺物実測図 (10)	62
第48回	出土遺物実測図 (11)	63
第49回	出土遺物実測図 (12)	64
第50回	出土遺物実測図 (13)	65
第51回	出土遺物実測図 (14)	66
第52回	出土遺物実測図 (15)	67

写真図版目次

- カラー図版 1 上 調査区遠景 (南から)
下 調査区遠景 (西から)
- カラー図版 2 上 東側調査区全景 (垂直)
下 東側調査区全景 (北から)
- カラー図版 3 上 西側調査区全景 (垂直)
下 西側調査区全景 (北から)
- 図版 1 上 SB01完掘状況 (西から)
下 SB01完掘状況 (北から)
- 図版 2 上 SB02・03完掘状況 (西から)
下 SB02・03完掘状況 (北から)
- 図版 3 上 SB04完掘状況 (北から)
下 SB04完掘状況 (西から)
- 図版 4 上 SB05東半部完掘状況 (東から)
下 SB05西半部完掘状況 (東から)
- 図版 5 上 SB07・08・09完掘状況 (北東から)
下 SB07・13完掘状況 (北から)
- 図版 6 上 SB09・10完掘状況 (北から)
下 SB09・10完掘状況 (南東から)
- 図版 7 上 SB11・12・16完掘状況 (南東から)
下 SB12・13・15・16完掘状況 (西から)
- 図版 8 上 SB13・15完掘状況 (東から)
下 SB18完掘状況 (北から)
- 図版 9 上 SB19・20・21完掘状況 (南から)
下 SB19・20・21完掘状況 (北から)
- 図版10 上 SB06・14・36・37貼床検出状況 (北から)
下 SB06・14・36・37完掘状況 (東から)
- 図版11 上 SB17・24・35完掘状況 (西から)
下 SB22完掘状況 (西から)
- 図版12 上 SB28貼床検出状況 (西から)
下 SB28完掘状況 (北から)
- 図版13 上 SB29・30完掘状況 (西から)
下 SB34・36・37完掘状況 (北から)
- 図版14 上 SB32・33完掘状況 (北から)
下 SB35完掘状況 (北から)
- 図版15 上 SB39～42完掘状況 (東から)
下 SB43～46完掘状況 (東から)
- 図版16 上 SB43・46～48完掘状況 (北から)
下 SB43・46～48完掘状況 (南から)
- 図版17 上 SB34・36・37・42完掘状況 (北西から)
下 SB39・40・41完掘状況 (北から)
- 図版18 上 SB45^婦 (北から)
下 SB45^婦 (西から)
- 図版19 上 SB46SP1土器出土状態 (北から)
下 SB46SP1土器出土状態 (東から)
- 図版20 上 SK13土器出土状態 (北から)
下 SK16土器出土状態 (北から)
- 図版21 上 SK15土器出土状態 (西から)
下 SK15土器出土状態 (北から)
- 図版22 出土遺物 (1)
- 図版23 出土遺物 (2)
- 図版24 出土遺物 (3)
- 図版25 出土遺物 (4)
- 図版26 出土遺物 (5)
- 図版27 出土遺物 (6)
- 図版28 出土遺物 (7)
- 図版29 出土遺物 (8)
- 図版30 出土遺物 (9)
- 図版31 出土遺物 (10)

I はじめに

1 調査に至る経緯

令和元年度の瀬戸山Ⅰ遺跡第7次発掘調査の調査中に、今回の対象地点（掛川市高田737-1、739-1、740、741-2、755）でも同様に、農地造成の計画が確認された。そこで、耕作者との協議の上、令和元年8月29日、30日に確認調査を実施した。確認調査では、計画予定地内に幅1mで長さ8mのトレンチを2本と長さ30mのトレンチ1本を設定した。その結果、地表下0.3m～0.6mにおいて弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構、遺物の存在が確認された。遺物はまとまった量の土器が出土した。これを受け耕作者と協議した結果、農地造成により遺跡の破壊は、免れないことから、記録保存のための本発掘調査を実施することとなった。

令和2年5月21日付けで、掛川市は静岡県に「埋蔵文化財発掘の届出書」を递達した。これに対し、令和2年6月4日付けで、静岡県から事業者あてに、本発掘調査実施を内容とする「土木工事等のための発掘に係わる指示について」が通知された。

2 遺跡をめぐる環境

(1) 地理的環境

掛川市は、静岡県西部に位置し、政令指定都市である浜松市と静岡市のほぼ中間で、東側は菊川市、島田市及び御前崎市に、西側は袋井市及び周智郡森町に接し、南側は太平洋側に面している。

市域の北部には、南アルプス最南端で標高839mの八高山を中心とした山地、中央部には古大井川の扇状地が隆起して形成された小笠山丘陵がある。今回発掘調査が実施された瀬戸山Ⅰ遺跡は、掛川市の北西、和田岡原と呼ばれる河岸段丘に位置する。八高山を源流とする原野谷川は、上流では蛇行しながら北西から南西に流れ、小規模な河岸段丘を形成している。そして、中流域では南に流れを変え、西岸には和田岡原と呼ばれる東西約1.2km、南北約2.2kmの段丘を形成している。和田岡原の南東に位置する岡津原は、独立段丘で、原野谷川はかつて、この東側を流れていた。

瀬戸山Ⅰ遺跡が位置する和田岡原段丘は、大きく分けて標高60m前後の吉岡原と呼ばれる上位段丘面と、標高40～50m前後の高田原と呼ばれる下位段丘面に区分される。段丘は、緩やかに南に向かい傾斜し、南側には、解析が見られ、小さな谷がいくつも形成されている。瀬戸山Ⅰ遺跡は上位段丘面の南端に位置し、今回の調査地点は、東側が解析谷に面している。

(2) 歴史的環境

和田岡原段丘は、現在広大な茶畑が広がっている他、宅地や企業用地として利用されている。段丘のほぼ全域が埋蔵文化財包蔵地とされており、縄文時代早期から始まり近世に至るまでの時代の遺構が確認されている。これまで茶畑の改植により発掘調査が進められており、特に弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落は広範囲に分布し、しかも堅穴住居跡などの遺構が密集して存在する状況が確認されている。第7次調査では、縄文時代中期後葉から後期前葉の土器が多量に出土しており、縄文時代の集落の広がりも推測される。また、古墳時代中期には史跡である和田岡古墳群が築造されており、この時期まで活発に人々が段丘を利用していたことが窺える。これ以降の時代では、第7次調査において、鎌倉時代の墓地と考えられる土坑群が確認されただけで、集落などは不明である。

II 調査の方法と経過

今回の調査区は、農地造成により遺跡の消滅が免れない1,500㎡を対象とした。

調査区の設定 グリッドは、前年度に実施した発掘調査区に準拠し設定した。対象地の地形に合わせて5m四方のグリッドを設定し、遺物の取り上げ、実測図面作成のための基準とした。東西の列は数字を用いたが、7次調査よりも西側に広がっているため0（原点）から西はローマ数字を用いIから順に表記した。南北の列はアルファベットを用いて表している。それぞれの交点をその杭の名称とし、グリッド名は北西角の杭の名称と一致させた。

発掘調査は、排土置き場用地内に確保する必要から調査区を東西の二つに分割し、東側の調査区を6月1日～10月19日まで、西側の調査区を10月20日～令和3年1月12日まで実施した。

重機掘削 耕作土の除去を、重機（バックホー）、クローラーダンプを1台ずつ用いて行った。

遺構検出 重機掘削後、鍬と鋤簾を使用し、5～10cmほど地表を掘り下げ、遺構検出面を整えた。再度、新たな地表面を鋤簾により丁寧に削り、遺構を検出した。

遺構掘削 検出した遺構は、移植ゴテを使用して掘り下げた。遺構の切り合い関係や堆積状況を確認するために、サブトレンチを設定し、あるいは土層帯を残して、土層の観察を行った。

遺構実測 遺物が集中して出土した場合は、遺物出土状態図を1/10の縮尺で、その他の所では平面図と土層断面図を1/20の縮尺で作成した。

写真撮影 現地記録写真の撮影は、6×7判（モノクロ）1台と35mm判（カラーネガ、リバーサル）2台、デジタルカメラ1台を使用した。

埋め戻し すべての作業が終了した後、重機（バックホー）、クローラーダンプを1台ずつ用いて、埋め戻し作業を行い、現地調査を終了した。

整理作業 出土した土器は、表面がもろくなっているため水洗いした後、バインダー液にひたし、強化した。土器本体に出土遺構等を注記し、また接合復元した後、実測等の作業を行った。現地で作成した図面類は、報告書用に編集し清書した。そして、遺物の写真撮影、調査所見等を原稿にまとめ、印刷に付した。



重機掘削風景



遺構掘削風景



土器検出作業風景

Ⅲ 調査の成果

(1) 遺構・遺物

今回の調査では、縄文時代早期と中期の小穴、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡49軒、掘立柱建物跡5棟、柵1、土坑、小穴を多数確認した。全体として遺構は、重複が著しく、特に竪穴住居跡と掘立柱建物跡はほとんどが重複しており、単独で検出されたものは非常に少ない。切り合いが著しいため、形状や規模を明確にできないものが多い。ここでは、主な遺構について述べていく。

①竪穴住居跡

SB01 (第4、38図)

P-5区に位置する。住居跡の東辺部は調査区外へ及んでいる。規模は、南北3.5mを測り、形状は隅丸方形を呈していたと推定される。掘り方の残存状況は悪く、覆土は5～10cmを確認しただけである。炉跡はほぼ中央付近で検出したが、貼床は明確ではなかった。明らかな主柱穴は認められなかったが、SP3は、その可能性が考えられる。

出土遺物は、第38図1、2で、1は掘り方の底面出土した折返口縁の壺で、内面には櫛刺突羽状文と2列以上2段の円形貼付文が施されていた。2は、高坏脚部である。

SB02、03 (第5、38図)

N、O、P-4区、O、P-5区に位置する。SB02、03の2軒が切り合い関係にあり、SB02がSB03を切っていることがわかった。検出できたのはSB02が南側約1/4、SB03が南側約2/3であり、北側は2軒ともに調査区外に及んでいる。形状は隅丸方形を呈していたと推定される。掘り方の残存状況は悪く、覆土の厚さは5～10cmであった。炉跡は、SB02では、ほぼ中央付近で4カ所、掘り方東側で1カ所、SB03では1カ所確認された。SB02の中央付近で確認された炉跡は、重なりあっており、建て替えが行われたと考えられる。また、SB02の掘り方東側の炉跡は、SB02に伴うものではなく、掘り方を検出できなかった別の竪穴住居跡が存在した可能性がある。SB02では貼床が検出できなかったが、SB03内の一部分に貼床が認められた。SB02の主柱穴は4つで、SP5～8である。SB03の主柱穴は2つ確認でき、SP1、12である。

出土遺物は、第38図3～8である。3は高坏脚部、5は甕口縁部でSB02の覆土から出土した。4はSB03の覆土から出土した折返口縁の壺、6はSB03のSP1から出土した折返口縁の壺、7はSB03内のSP17から出土した羽状縄文が施された壺の体部である。8は羽状沈線文が施された弥生時代中期の壺の体部であるが、流れ込みであると考えられる。

SB04 (第6、38図)

Q、R-4、5区に位置する。住居跡の東辺部は調査区外へ及んでいる。覆土の堆積状況と掘り方の形状から建て替えが行われ、それに際して北西へ拡張されたと考えられる。規模は、当初は南北約4.8m、拡張後は南北約5.2mを測る。形状は隅丸方形を呈していたと推定される。一部には、壁溝が検出された。炉跡や焼土が複数箇所認められ、貼床はほぼ全域で認められた。建て替え前の主柱穴はSP11、12、24の3つ確認でき、建て替え後の主柱穴もSP15、22、19の3つ確認できる。

出土遺物は、第38図9～40である。9から12は折返口縁の壺、13は大型折返口縁の壺である。

13は、口縁上の平坦部に柳刺突文を、内面に円形竹管文を2段施している。14は鉢の口縁部で、外面に刻目とハケ工具による斜線文、その下に円形貼付文を施し、内面は粗いヨコミガキ調整を行っている。15～18は壺体部片、19～25は壺底片である。26～28は壺の口縁部、29、30は壺の体部と台部との接合部、31は台付壺の台部である。32は鐙状口縁高坏の口縁部、33は高坏坏部と脚部の接合部である。34は小型高坏である。35～37はSP23から出土し、35は小型壺、36は鐙状口縁高坏の口縁部、37は鐙状口縁高坏の脚部である。39と40は覆土から出土したガラス小玉である。これらの出土遺物から、SB04の時期は弥生時代後期後半に位置づけられる。

SB05 (第4図)

N-0、1区に位置する。住居跡の北半部は後世の掘乱により壊されている。規模は、東西4.6mを測り、形状は隅丸方形を呈していたと推定される。掘り方の残存状況は非常に悪く、覆土の厚さは5cmほどであった。炉跡と貼床は、確認されなかった。主柱穴はSP5、9の2つが確認できた。SP5は、柱痕跡を明確に観察することができた。

出土遺物はいずれも小片であり、図示しなかった。

SB06、34、36、37 (第7、8、39、46、47図)

O、P-1、0、1区に位置する。前半の調査でSB06を検出し、SB34、36、37は後半の調査で検出した。SB06は、SB07、36、37、SB14、15と重複し、SB34はSB36、37と重複している。覆土の堆積状況と検出状況からSB34→SB36、37→SB06→SB14の新旧関係が認められた。SB06と07の新旧関係は不明である。各住居跡の規模は、SB06が不明、SB34が東西約4m、南北5.2m、SB36が不明、SB37が東西約4.8m、南北推定5.6mを測る。形状は、SB06が不明、SB34、36、37は隅丸方形を呈していたと推定される。炉跡は、SB06の床面中央付近と、SB36、37で確認された。貼床はSB36と37で確認できた。また、SB06、36、37は一部分で壁溝が確認された。SB36、37の南西部分で壁溝が3条検出されたが、内側の壁溝がSB37、真ん中と外側の壁溝がSB36に伴う。SB36は建て替えを行っていたと考えられる。主柱穴は、SB06に伴うものは、SP1、3、4、9、SB34はSP1、6、12、19、SB36は2時期分あり、SP2、3(SB37)、13(SB37)、8とSP1、8(SB06)、9、13、SB37はSP2、SP2(SB36)、SP12(SB36)、SP15である。

出土遺物は、第39図の41～46がSB06から出土したものである。41は器種不明(西遠江伊場様式の高坏か)で口唇部にヨコナデを施している。42は折返口縁の壺、43は器台、44は高坏坏部、45は台付壺の台部、46は弥生時代中期の壺の口縁部である。

第46図の232～237がSB34から出土したものである。232と234は、折返口縁の壺で、ともに内面と口唇部に縄文を施している。口唇部には縦沈線を部分的に施しているが、その単位は不明である。233は丸子式の壺の口縁部である。235～237は縄文時代中期の深鉢の小片である。

第47図の244～250がSB36、37から出土したものである。244は折返口縁の壺、245は複合口縁の壺、246は壺肩部、247は台付壺の台部、248は古墳時代前期の高坏脚部、249は高坏坏部である。250は有茎長三角形の鉄鏃で、鏃身間は2段で上は撫間となっている。茎は大半が欠損し、端部は曲がっている。年代は、古墳時代後期の可能性が高い。

SB06、34、36、37の時期は、竪穴住居跡が数軒重なり合っていることから、出土遺物の土器も混在している。したがって各住居跡の時期を断定することは困難であるが、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて建てられたことは明確である。鉄鏃は後の流れ込みと考えられる。

SB07、13 (第9、39～42図)

O、P-1、2区に位置する。SB07とSB13は一部分が重なり合い、さらにSB14、15と重なりあっている。SB13は土層の堆積状況から、SB07を切っていることがわかる。規模は、SB07が東西約4.6m、南北は不明、SB13が東西4m、南北は3.4mを測る。SB13は小形の竪穴住居である。形状はともに楕円形である。2軒とも中央付近において貼り床と炉跡が確認され、壁溝も確認された。SB07は、2条の壁溝が検出され、建て替えが行われたと考えられる。主柱穴は、SB07が2時期分でSP1・2、SP2 (SB13)、SP4 (SB13)、SP7とSP5、SP2 (SB13)、SP4 (SB13)、SP8である。SB13の主柱穴は、SP3、SP5である。

SB07の出土遺物は、第39図47～50で、47は折返口縁の壺、48と49は壺の肩部である。50は、黒曜石の石鏃である。SB13の出土土器は、第40、41図の84～104である。84と85は折返口縁の壺、86～88は壺の肩部、90は二重口縁の壺、91～93は壺の口縁部、94と95はS字状口縁壺の口縁部、96と97はS字状口縁壺の台部である。98は台付壺の台部、99は器台の脚部である。100はSP7から出土した壺の体部である。101と104は弥生時代中期嶺田式の壺の口縁部、103は弥生時代中期丸式子の壺の口縁部である。

出土土器も混在が認められるものの、住居跡の時期は、SB07が弥生時代後期、SB13は古墳時代前期と推定される。なお、弥生時代中期の土器は、混入品であろう。

SB08～10 (第10、11、39図)

O-2、3、P-2～4区に位置する。SB08はSB09と10、さらにSB07とも重なりあっている。掘り方の残存状況は悪く、覆土の厚さは5cm程度である。遺構検出の際にSB08は、SB07、09、10に切られていることが確認された。しかし、SB08は主柱穴が2時期分確認され、焼土はSB09の掘り方の上面で確認されたことから、SB08→SB09→SB08 (建て替え)であったと考えられる。規模は、SB08が東西約6.2m、南北が不明、SB09と10は不明である。形状は3軒ともに楕円形であったと考える。炉跡はSB08が中央付近で、SB09は中央から西寄り、SB10は中央付近で確認された。SB08と10は壁溝も確認された。主柱穴は、SB08が2時期分でSP3、SP9、SP13、SP27 (SB09)とSP4、SP8、SP31 (SB09)である。SB09はSP4、SP19、SP29、SP38で、SB10はSP17、SP31、SP44、SP46である。

SB08の出土遺物は、第39図51～53、59である。51は壺の底部である。52と53はSP4から出土したもので、52は壺の体部と台部の接合部、53は鐙状口縁高坏の口縁部である。59はSB08の主柱穴としたSP27から出土した壺の口縁部である。

SB09の出土遺物は、第39図55～60である。55は折返口縁の壺、56は壺の肩部、57は鐙状口縁高坏の坏部と脚部の接合部、58はSP9から出土した台付壺の体部、60はSP22から出土した緑色片岩製の打製石斧である。

SB10の出土遺物は、第39図61～65である。61と62は台付壺の体部で、62はSP17から出土した。64はSP46から出土した台付壺の体部と台部の接合部である。63はSP44から出土した弥生時代中期中葉の嶺田式土器の壺口縁部である。65は縄文時代中期の土器片である。

SB08～10の時期は、混入土器はあるものの、弥生時代後期と推定される。

SB11、12、16 (第12、13、40、42、43図)

Q-1～3、R-2、3区に位置する。SB11はSB12、16と重なり合い、SB12はSB13、15と

重なりあっている。遺構検出の際に、SB11はSB12に切られ、SB12はSB15に切られていることが認められた。SB12と16との新旧関係は不明である。規模は、SB11が東西不明、南北が4m、SB12は不明、SB16が東西5.2m、南北が不明である。形状はSB11が隅丸方形で、SB12は東辺の掘り方が確認されただけであり隅丸方形と考えられる。SB16は隅丸長方形と推定される。SB12は床面中央付近に4箇所の焼土と南東角に1箇所の焼土が確認された。南東角の焼土は、SB11に伴う可能性がある。SB12の焼土の上面からは、台付甕が3個体出土している。SB16は中央から西よりで焼土が確認された。壁溝は、SB12と16で確認された。主柱穴は、SB11がSP1、SP5、SP4(SB12)、SP52(SB12)、SB12がSP15、SP22、SP38、SP40、SB16がSP2、SP11、SP19である。

SB11の出土遺物は、第40図66～69である。66は壺の底部、67は甕の口縁部、68は台付甕の台部である。69はSP1から出土した甕の口縁部である。

SB12の出土遺物は、第40図70～83と第43図141～143である。70と71は壺の肩部、72は壺の底部である。73は台付甕の台部、74と75は在地産のS字状口縁甕の台部である。76は小型器台、77は高坏の坏部と脚部の接合部である。78は二重口縁の壺、79は壺の体部、80は甕、81はS字状口縁甕、82はS字状口縁甕の体部と台部の接合部である。81と82は、ともに搬入品である。83は、単純口縁の壺である。89はSB12と15が重なる部分から出土した複合口縁の壺で、LRの縄文と押し引かれた櫛描波状文を施した後、タテ沈線文を6本以上入れている。第42図141～143は、台付甕である。

SB16の出土遺物は、第43図144～155である。144は小型の壺底部、145は甕の口縁部、146はS字状口縁甕、147は台付甕の台部、148は菊川式土器の高坏の坏部片、149は高坏脚部である。150～154はSP190の出土遺物である。150は壺底であり、151は小型丸底甕で、赤彩が施されている。152は大型のS字状口縁甕の台部、153は台付甕の台部である。154は高坏脚部である。155はSP11から出土した鉄斧状鉄器である。大きさは長さ7.7cm、幅4.2cm、厚さ1.45cmで、重さは126.2gである。刃部は作り出されていない。

SB11と16の時期は、出土土器から古墳時代前期と推定される。なお、鉄器は錆の質感から、中近世以降と思われる。

SB14、15 (第14、41、42図)

P-0、1、Q-0、1、2区に位置する。二分した調査区の中央に位置し、北西部分と南東部分に分けて調査を行った。SB14と15は、遺構検出面での精査により、周囲に存在するすべての堅穴住居跡(SB06、07、12、13、36、37)を切っていることが認められた。規模は、SB14(外側)が東西不明、南北が8m、SB15(内側)は規模不明である。SB14は今回の調査で確認した住居跡群の中で、大型の部類にはいる。形状はともに隅丸方形である。炉跡は2箇所を確認され、中央付近の炉跡は底面に接しているが、北側の炉跡は底面から約10cm高い位置で確認された。また、この炉跡とはほぼ同じ高さで炭化材片が出土していることから、上面の住居跡は焼失家屋であったと考えられる。SB14は壁溝をもち、そして直径10～15cm、深さ約20cmの壁柱穴が連続して確認された。主柱穴は、SP5(SB14)、SP5(SB15)、SP32、SP41であり、2時期としたが主柱穴は共有している。2軒の家としたが、1軒の家の可能性もある。

SB14と15の出土遺物は、第41図105～123、第42図124～140であるが、どちらの住居跡に伴うか判断できなかった。105は壺の頸部で櫛押圧沈線文が施されている。106と107は壺の肩部

片である。108と109は複合口縁壺の口縁部で、108は羽状縄文の上に棒状貼付文、109は柳刺突羽状文の上に棒状貼付文を施している。110～113は壺底、114は弥生時代中期中葉の瓜部式土器の小型品である。115は瓢壺の口縁部、116と117は甕の口縁部、118と119はS字状口縁甕、120は台付甕の台部と体部の接合部である。121は台付甕の台部、122と123はS字状口縁甕の台部である。124～129は高坏である。130は小型器台の坏部、131はてづくねの鉢である。132は、SB14のSP4から出土した台付甕の台部である。133はSB14北西角のSP6から出土した鈎状口縁高坏の坏部である。134～136は、SP39から出土した。135は畿内系の布留式土器の小型甕、136は二重口縁の壺である。137～139は弥生時代中期の条痕を施した甕片、140は黒曜石の石籤である。

出土土器は混在が認められるものの、SB14、15の時期は、古墳時代前期と推定される。

SB17、24～26 (第15、43～45図)

R、S-1、2、T-1区に位置する。現地調査の際には、4軒分の竪穴住居跡を想定したが、整理作業の段階で平面図を検討した結果、SB17と25、26は同じ住居跡の可能性が高いと考えるに至った。SB46、47と重なり合い、SD04や土坑とも重なりあっているため、掘り方の切り合いを確認することは、難しかった。SB17と25、26で1軒分とすると規模は、東西5.2m、南北5.2mであり、SB24は不明である。形状は、隅丸方形を呈していたと推定される。小さな焼土が掘り方内に、点在していた。主柱穴は、SB17に伴うものは、SP1、9、22、23、SB24はSP8、30、300である。

SB17の出土遺物は、第43図の156～159で、156と157はS字状口縁甕、158は弥生時代後期菊川式土器の高坏脚部、159は古墳時代前期の高坏脚部である。第44図の187と188がSB24の出土遺物である。187は小型の甕、188は高坏である。189はSB25のSP21から出土したS字状口縁甕である。190と191は、縄文土器片である。第45図192～194がSB26の出土遺物である。

SB18 (第16、43、44図)

S-4区に位置する。SB18Aと18Bと2軒分としたが、Bの東側に壁溝が確認されており、もう1軒分が存在した可能性が高い。住居跡の東側は、調査区外へ及んでいる。18Aが18Bを切っており、SP1は、大型の掘立柱建物跡のSH02を構成する柱穴で、土層の堆積状況からSB18Bを切っていることが認められた。規模は、SB18Bが東西不明で、南北3.4mを測る。形状は、隅丸方形を呈している。炉跡は、SB18Bの中央からやや北寄りで確認された。住居跡の床面には小穴は認められたが、主柱穴は、確認できなかった。

SB18の出土遺物は、第43図の160～168、第44図の169～175である。160は広口壺、161は折返口縁の壺、162～164は壺の肩部、165は壺底である。166と168は鉢の口縁部、167は甕形鉢である。169はS字状口縁甕、170は菊川式土器の高坏脚部、171は高坏脚部である。172はSP5から出土した壺底、173はSP6から出土した壺肩部、174と175は、SP9から出土した壺の肩部と鈎状口縁高坏の口縁部である。

SB18の時期は、出土土器から、弥生時代後期と推定される。

SB19～21 (第17、44図)

S、T、U-2～3区に位置する。遺構検出の際にSB19と20がSB21を切っていることが確認された。SB19と20の新旧関係は不明である。3軒ともに壁溝が巡っている。SB19と20には、3条の壁溝が巡り、南側の柱穴と重なる部分は、壁溝が柱穴を切っていた。各住居跡の規模は、SB19

と20は東西4.2m～5.4m、南北は6.4m、SB21は不明である。いずれの住居跡の平面も、楕円形である。炉跡は、SB19、21の床面で確認された。壁溝は3条検出されたが、主柱穴を確認できたのは、2軒分あった。主柱穴は、SP 5、7、15、21とSP 7、10、15、23である。SB21の主柱穴はSP 4、21である。

SB19と20の出土遺物は、第44図の176～179である。176は壺の肩部、177は複合口縁の壺、178は折返口縁の壺である。179はSP 3から出土した小型高坏である。SB21の出土遺物はいずれも小片であり、図示しなかった。

SB22、23 (第18、44図)

T、U-1区に位置する。SB22と23は重なり合い、SB23はSB24とSB45に切られている。SB22は、掘り方の1/4を検出したが、南側は調査区外へ及んでいる。規模は、ともに不明である。形状は、SB22が隅丸方形を呈していたと思われる。炉跡は、各住居跡内で確認された。主柱穴は、SB22に伴うものは、SP24、34、SB23はSP 1、6、31である。

SB22の出土遺物は第44図の180～182で、180は高坏口縁部、181は鉢である。182はSP38から出土した壺底である。SB23の出土遺物は、183～186である。183は壺の口縁部、184は小型高坏の脚部である。185と186は、SP17から出土した。185は、赤彩が施された高坏脚部、186は器台である。

SB28 (第19、45図)

N-1、2区に位置する。今回の調査では単独で確認された唯一の住居跡であり、掘り方の全体が検出された。規模は、東西5.2m、南北4.2mを測り、形状は隅丸方形を呈している。炉跡は中央からやや西よりに認められ、その周囲では炭化材の小片が発見された。貼床はほぼ全域で認められた。主柱穴はSP 5または6、8、13の3つが確認でき、北東角の主柱穴は確認できなかった。

出土遺物は、第45図195～198である。195は床面直上から出土した壺の頸部である。櫛描縞状文の上に5単位6方向の円形貼付文を施している。196は、SB28を切るSP337から出土した甕である。197はSP 4から出土した西遠江の伊場式土器の高坏脚部である。198はSP 7から出土した。出土遺物は少量であるが、SB28は弥生時代後期に位置づけられる。なお、198はSP 7から出土した条痕文土器の破片で、混入と考えられる。

SB29～31 (第20、45、46図)

O、P、Q-II、III区に位置する。住居跡の東辺部は調査区外へ及んでいる。貼床の残存状況からSB29と30がSB31を切っていることが判明した、SB29と30の切り合いは、SB30が29を切っているようであるが、明確ではない。規模は、SB29が東西6m、南北不明、SB30が東西5.6m、南北不明である。形状は楕円形を呈していたと推定される。土層の観察から貼床は少なくとも3面認められ、炉跡もSB29側で3つ、SB30側で1つ確認された。しかし、掘り方の東側で壁溝が4条確認されていることから、4回の建て替えが窺える。主柱穴は2時期分でSP 2、5、5B (SB30)または5A (SB30)、SP13A (SB30)または12 (SB30)である。

SB31の規模は東西不明、南北2.8mと小型の住居跡で、形状は隅丸方形と推測される。貼床は全面で認められた。

SB29の出土遺物は、第45図199～216である。199は単純口縁の壺、200と201は折返口縁の

壺で上位の貼床面から出土した。202と203は壺の体部、204は鉢の口縁、205は壺または鉢の底である。206は小型の甕、207と208は台付甕の台部である。209と210は菊川式土器の高坏で、209は坏部、210は脚部である。211は鉢の口縁部である。212～216は丸子式土器の甕口縁部である。

SB30の出土遺物は、第46図217～225である。217は嶺田式土器の壺口縁、218～221は台付甕である。222は菊川式土器の高坏脚部である。223は大型の鉢、224は複合口縁の壺である。225はSP10から出土した折返口縁の壺である。

SB31の出土遺物は、第46図226～228である。226は複合口縁の壺、227は折返口縁の壺、228は菊川式土器の高坏脚部である。

出土土器から住居跡の時期は、3軒ともに弥生時代後期に位置づけられる。なお、弥生時代中期の土器は、混入品であろう。

SB32、33 (第22、46図)

O-II、III、P-II区に位置する。SB29と重なり合っているが、新旧関係は不明である。調査の際には、2軒の住居跡と考えたが、平面図等をもとに再検討した結果、1軒である可能性が高い。SB29もこの住居跡もSP572に切られていた。覆土はわずかであったが、貼床は一部確認できた。規模は、東西5m、南北4mを測る。形状はいびつな楕円形を呈している。炉跡は中央付近で認められた。主柱穴はSP2、3、6、8である。

出土遺物は、第46図229～231である。229と231は弥生時代中期、230は縄文時代の土器片で、住居跡に伴うものではないと考えられる。小片で図示しなかったが、弥生時代後期の土器片が存在する。

SB35 (第23、46図)

S、T-II、III区に位置する。SB38と切り合い関係にある。掘り方の残存状況は悪く、覆土の厚さは5～10cmであった。規模は、東西4m、南北3.4mを測り、形状はいびつな隅丸方形を呈している。炉跡は、中央付近からやや北寄りで確認された。主柱穴は確認できなかった。

出土遺物は、第46図238～243である。238は折返口縁の壺、239は甕の口縁部、240、241、243は弥生時代中期全様の丸子式土器で、240は壺の肩部、241は甕の口縁部、243は甕の底部である。242は縄文土器片である。

SB38 (第24、46図)

S-I、II区に位置する。西側のSB35と東側のSB43に切られている。掘り方の残存状況は悪く、検出面において床面の一部が認められた。覆土は厚い所で5cm程度であった。規模や形状は不明である。炉跡は、1箇所確認された。主柱穴はSP590、647あるいは645、636と考えられる。

出土遺物はいずれも小片であり、図示しなかった。

SB39～41 (第25、47、48図)

P、Q-I、II区に位置する。3軒は切り合い関係にあり、土層の堆積状況からSB40がSB39と41を切っていることが確認された。規模は、SB39が東西不明、南北3.4m、SB40は東西3.2m、南北3.6m、SB41は東西3.8m、南北は不明である。3軒とも比較的小規模な住居跡である。形状は、SB39が隅丸方形、SB40は隅丸方形、SB41は楕円形を呈している。炉跡は、SB40で2箇所、SB41

で1箇所認められた。貼床はSB40と41の炉跡の周囲で認められた。主柱穴は、SB39がSP3、8、SB40はSP24、42、SB41はSP20、40である。

SB39の出土遺物は、第47図254～260である。254は折返口縁の壺、255と258は壺の肩部、256は壺底である。257は受口状口縁の甕である。259は台付甕の台部である。260は砂岩製の投掷石で、表面すべて敲打している。

SB40の出土遺物は、第47図261～263である。261は壺の肩部、262と263は甕である。

SB41の出土遺物は、第47図264～272と第48図273～283である。264は単純口縁の壺、265は折返口縁の壺、266と267は壺の肩部、268は壺底である。269は鉢、270は小型の鉢である。270は口縁部に斜めハケのち櫛刺突文を、口唇部にも櫛刺突文を施している。体部には櫛刺突羽状文を施している。271と272は、甕である。273～275は菊川式土器の高坏脚部である。273は櫛刺突羽状文を、274は櫛押沈線文を施している。276～279は、炉跡北側から出土した。276は単純口縁の壺、277は壺または高坏の口縁部、278は台付甕の台部と体部の接合部で、内面は焦げている。279は高坏の坏部と脚部の接合部である。280と282は弥生時代中期前葉の丸子式土器である。出土土器から住居跡の時期は、3軒ともに弥生時代後期に位置づけられる。なお、弥生時代中期の土器は、混入品である。

SB42 (第26、48図)

P、Q-0、I区に位置する。SB34と41、SK19と切り合い関係にある。SB42は土層の堆積状況からSB41に切られていることが確認された。規模と形状は不明である。炉跡は、1箇所だけ認められた。主柱穴は、SP9、17、668が考えられる。

出土遺物は、第48図284と285である。284は単純口縁の壺、285は弥生時代中期前葉の丸子式土器の壺の肩部である。

SB43 (第27、48、49図)

S-I区に位置する。西側のSB38を切っているが、東側のSB46との新旧関係は不明である。規模は東西5m、南北4.4mを測り、形状は楕円形を呈している。炉跡は、中央からやや西寄りだけ認められた。貼床は炉跡の周囲で認められた。主柱穴は、SP5、6または8、15、25である。

出土遺物は、第48図286～296と第49図297～306である。286は壺の頭部で、籠状の櫛描波状文を施している。287は複合口縁の壺で、口唇部に縄文を施し、口縁部には棒状貼付文を施す。288～290は壺底である。291～296は甕で、295は床面から出土した。296と303はSP35から出土した台付甕と高坏坏部である。297と298は台付甕の台部である。299～302は菊川式土器の鐮状口縁高坏で、299～301はその坏部、302は脚部である。304はSP25から出土した菊川式土器の高坏である。305は丸子式土器の甕の口縁である。306は輝緑岩製の磨製石斧で、基部端には朱が付着し敲打痕があることから、石杵に転用されたと考えられる。

SB44、45 (第28、29、49図)

S-0、T-0、1、I区に位置する。住居跡の南辺は、調査区外へ及んでいる。2軒は切り合い関係にあるが、新旧関係は不明である。規模は、SB44が東西4.8m、南北は不明、SB45は東西約7m、南北7.6mを測る。SB45は大型の竪穴住居跡である。形状は、SB44がいびつな隅丸方形、SB45は隅丸方形を呈している。炉跡は、SB44は中央からやや東寄りで、SB45はほぼ中央付近で

認められた。貼床は炉跡の周囲で認められた。SB45では、壁溝が認められた。主柱穴は、SB44が不明、SB45がSP26、27、33である。SB45で特筆すべきことは、カマド状の炉が3箇所を確認されたことである。①は10cm×25cmの大きさで、南側に向かって開口している。周囲は、焼土で囲まれ、中から土器(324と325)が出土した。床面は火を受け固くしまり、その上に炭火材や炭混りの土が堆積していた。②は15cm×15cmの大きさで、周囲は焼土で囲まれている。床面は焼土と炭混じりの土である。③は30cm×30cmの大きさで、南側に向かい開口している。①と同様に床面は固くしまり、その上に焼土混りの土が堆積していた。出土土器はSB45と同時期のものであることから、住居跡に伴うと考えられる。

SB44の出土遺物は、第49図307～314である。307は台付甕の台部、308は台付甕の台部と体部の接合部である。309と310は菊川式土器の高坏脚部である。311は高坏脚部、312はSP27から出土した壺または高坏の口縁部である。313は緑色片岩の磨製石斧、314は投弾石である。

SB45の出土遺物は、第49図315～325である。315と316は、甕である。317～323はSP35から出土した。317は単純口縁の壺、318と319は、壺の底部である。320と321はともに直口壺であるが、別個体である。322は小鉢、323はS字状口縁甕の台部である。324と325は上記したカマド状焼土①から出土した直口壺と高坏坏部である。

住居跡の時期は、出土土器からSB44が弥生時代後期に、SB45が古墳時代前期に位置づけられる。

SB46、47 (第30、50図)

R、S-0区に位置する。SB46はSB47を切っているが、SB43との新旧関係は不明である。規模は、SB46が東西5.2m、南北5m、SB47は東西約4m、南北3mを測る。形状は、SB46が隅丸方形、SB47は隅丸長方形を呈している。炉跡は、SB46が1箇所、SB47が1箇所認められた。またSB46の南東角で、炉跡が認められた。主柱穴は、SB46がSP17、19、32で、SB47はSP49、54である。

SB46の出土遺物は、第50図326～342である。326は単純口縁の壺、327は折返口縁の壺、328は壺の肩部、329は柳ヶ坪型壺、330は直口壺である。331～332はく字口縁の甕、334はS字状口縁の甕である。335と336はSP1から出土した広口壺と単純口縁の壺である。337は菊川式土器の高坏脚部、338は高坏脚部である。339は器台で内面に赤彩が施されている。340は小型高坏である。341と342は弥生時代中期前葉の丸子式土器の甕口縁である。

SB47の出土遺物は、第50図343～350である。343は単純口縁の壺、344は壺の肩部、345と346は壺の底部である。347はS字状口縁の甕である。348は菊川式土器の高坏脚部、349は高坏脚部、350は小型高坏である。

住居跡の時期は、混在はあるものの、出土土器から古墳時代前期に位置づけられる。

SB48、49 (第31、50図)

R-0、I、II、S-1、II区に位置する。SB43はSB48と49を切っているが、SB48と49の新旧関係は不明である。規模は不明であるが、SB48の形状は楕円形と考えられる。炉跡は、それぞれ中央付近で認められた。主柱穴は、SB48がSP10、24、36、57で、SB49はSP41、59、607である。

SB48の出土遺物は、第50図351～354である。351は壺または高坏の口縁部、352は複合口縁の壺である。353はSP46から出土した台付甕の台部である。354はSP60から出土した壺の底部である。

SB49の出土遺物は、第50図355～358である。355は壺または高坏の口縁部、356は甕、357は

弥生時代中期の甍、358は台付甍の台部である。

② 掘立柱建物跡と櫓列

今回の調査では、5棟の掘立柱建物跡と1つの櫓列を確認した。掘立柱建物跡は、柱間が1間×2間が1棟、1間×3間が3棟、1間×4間が1棟である。棟の主軸を南北にするものは2棟、東西にするものは3棟である。

SH01 (第32図)

S、T-1、2区に位置する。規模は梁間1間×桁行3間である。主軸方位はN-74°-Eを測る。建物の規模は3.0m×4.2mである。柱穴は直径60～80cmである。図示出来る出土遺物はなかった。

SH02 (第33図)

R、S-3、4区に位置する。規模は梁間1間×桁行4間である。主軸方位はN-50°-Eを測る。建物の規模は5.8m×6.4mで、大型の部類に属する。柱穴は直径80～100cmである。2つの柱穴は、調査区外へ及んでいる。図示出来る出土遺物はなかった。

SH03 (第34図)

M、N-II、III、O-III区に位置する。規模は梁間1間×桁行2間である。主軸方位はN-63°-Eを測る。建物の規模は4.2m×5.4mである。柱穴は直径60～100cmである。図示出来る出土遺物はなかった。

SH04 (第35図)

O、R-II、III区に位置する。規模は梁間1間×桁行3間である。主軸方位はN-1°-Eを測る。建物の規模は3.4m×5.4mである。柱穴は直径60～80cmで、一部の掘り方は布掘りとなっている。図示出来る出土遺物はなかった。

SH05 (第36図)

R、S-III区に位置する。規模は梁間1間×桁行3間である。主軸方位はN-1°-Eを測る。建物の規模は3.0m×6.5mである。柱穴は直径60～80cmである。図示出来る出土遺物はなかった。

SA01 (第37図)

R、S、T-3区に位置する。規模は5間分を確認した。主軸方位はN-74°-Eを測る。建物の規模は3.0m×4.2mである。柱穴は直径80～100cmである。SH02の柱穴と重なるものがある。図示出来る出土遺物はなかった。

③ 縄文時代早期 (第51、52図)

縄文時代早期の押型文土器は、これまでの調査でも出土していたが、今回の調査で数多くの土器が出土し、初めて遺構も確認することができた。

SP568 (第51図)

S-III区に位置する。大きさは長軸70cm、短軸55cmで、深さは40cmを測る。この小穴の上層から第51図の359～363が出土した。359と360は格子目文で、359は深鉢の口縁部である。360は、

横方向の山形文である。362 と 363 は、撫糸文を施している。3種の押型文が出土した。

SB43 (第 27、51 図)

第 51 図の 364 は SB43 の床面から出土した押型文土器の深鉢である。格子目文は、口縁部から胴部下半まで施されている。底部は、確認することができなかった。

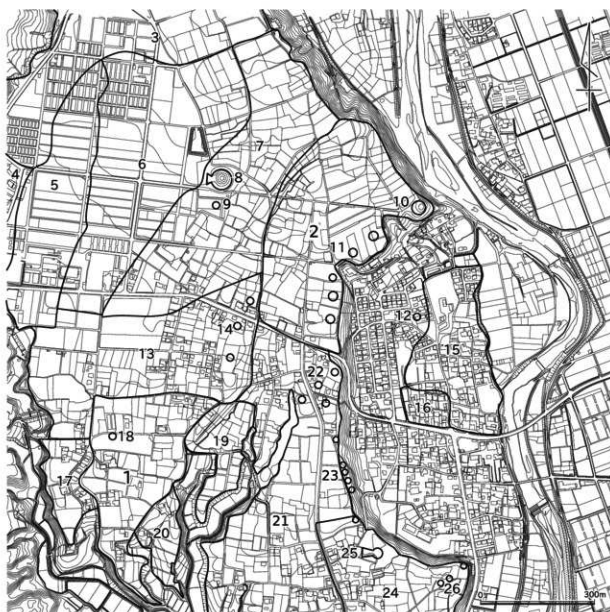
他の押型文土器は、遺構に伴うものではない。第 51 図の 365 ～ 377 が山形文である。378 は小片であるが深鉢の口縁部で、楕円文である。379 は、タテ長格子目文、380 ～ 383 は方形文、384 ～ 388 は市松文で、386 は原体を斜めに回転して施文したものである。

389 は、頁岩製の削器である。長さ 5.6cm、幅 3.1cm、厚さ 1.2cm、重さ 25.0g である。縦長剥片を用いて、左側縁と下端部に刃部加工が施されている。打面は節理面である。正面の剥離方向が主要剥離面の剥離方法と共通して入り、連続的に縦長剥片を剥離したものと考えられる。

390 は使用痕のある頁岩製の横長剥片である。長さ 3.85cm、幅 8.45cm、厚さ 1.7cm、重さ 52.0g である。下端部に微細な剥離痕が観察され、使用痕と考えられる。打面は節理面である。自然面を一部残している。391 は、使用痕のある頁岩製の横長剥片である。長さ 3.05cm、幅 4.6cm、厚さ 0.95cm、重さ 8g である。縁辺部に微細な剥離痕が観察され、使用痕と考えられる。打面は複剥離面である。

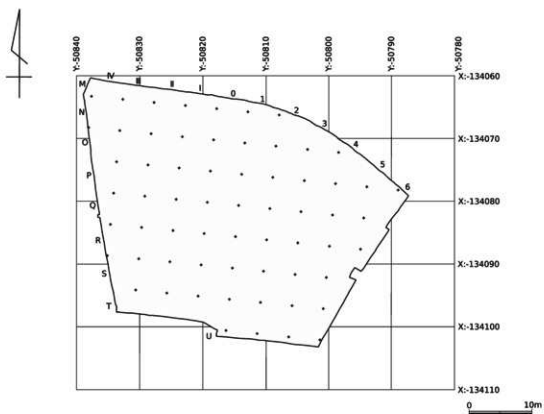
最後に

今回の報告書では、8 次調査の成果を十分に報告することができなかった。また 7 次調査と合わせた弥生時代後期から古墳時代前期の集落の様相を検討することもできなかった。それでも 2 カ年にわたる調査において、古墳時代前期になると 10 m に近い大型の堅穴住居跡が現れ、しかもそれに大型の掘立柱建物跡も伴うことが確認できたことは大きな成果と言える。今回十分に分析できなかったことは、別の機会に改めて報告したい。

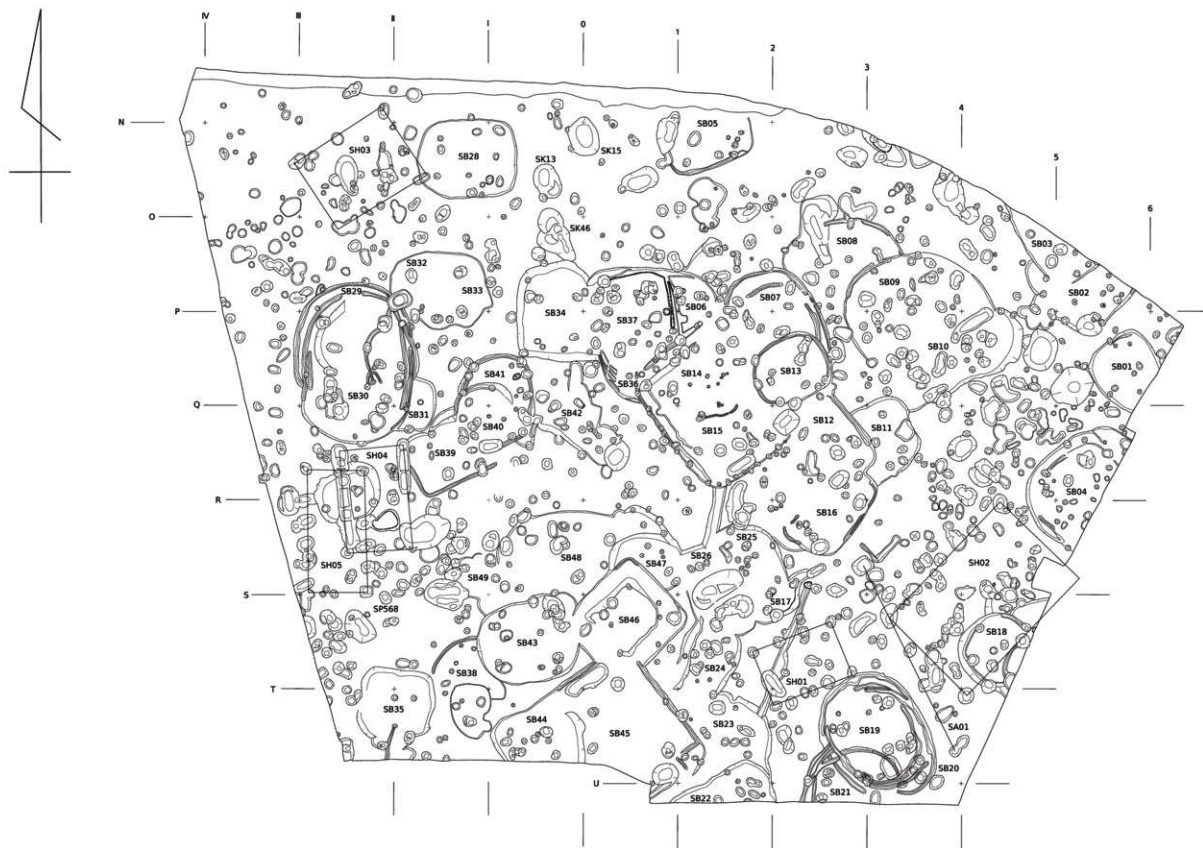


番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	瀬戸山Ⅰ遺跡	10	春林院古墳	19	花ノ腰遺跡
2	吉岡下ノ段遺跡	11	吉岡下ノ段古墳群	20	瀬戸山Ⅲ遺跡
3	東原遺跡	12	宮脇行人塚古墳	21	高田遺跡
4	今坂遺跡	13	吉岡原遺跡	22	藤六古墳群
5	溝ノ口遺跡	14	吉岡原古墳群	23	東登口古墳群
6	中原遺跡	15	林遺跡	24	女高遺跡
7	高田上ノ段遺跡	16	西村遺跡	25	行人塚古墳
8	吉岡大塚古墳	17	瀬戸山Ⅱ遺跡	26	高田古墳群
9	高田上ノ段遺跡	18	瀬戸山古墳		

第1図 周辺遺跡位置図

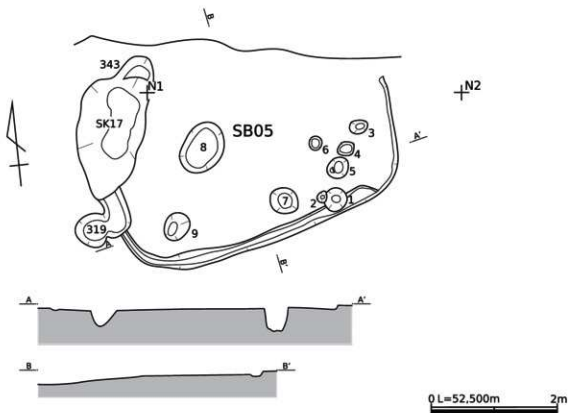
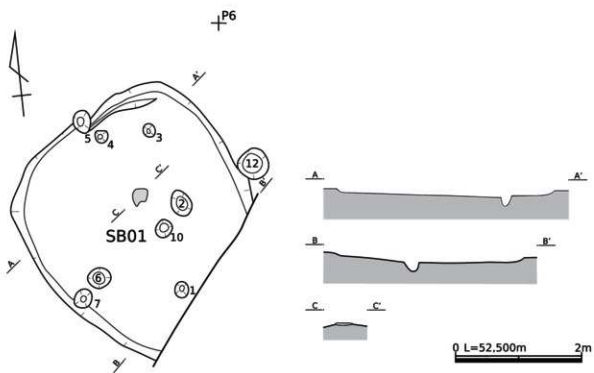


第2図 調査地点位置図

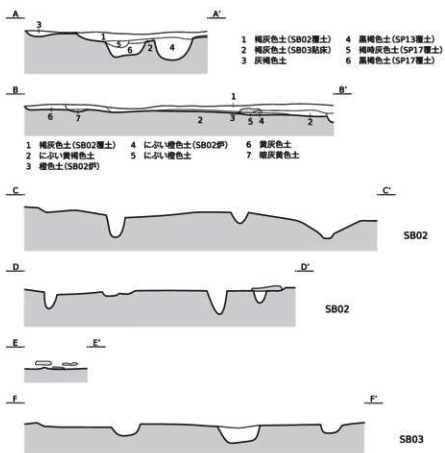
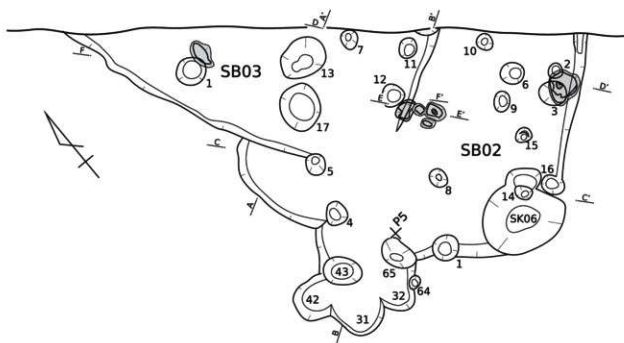


第3図 遺構全体図

0 10m

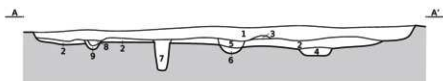
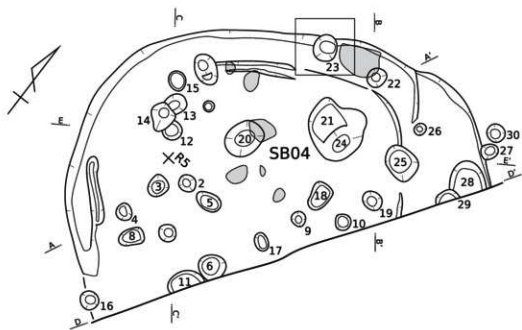


第4図 SB01、05実測図

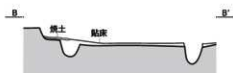


0 L=52.700m 2m

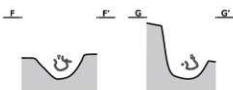
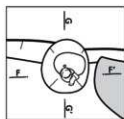
第5図 SB02、03 実測図



- | | | |
|-------------------|-----------------|----------------|
| 1 黒褐色土 | 4 黒褐色土 (SP21層土) | 7 黄灰色土 (SP2層土) |
| 2 黄灰色土 (粘床) | 5 黄灰色土 (SP20層土) | 8 黄灰色土 (SP4層土) |
| 3 黒褐色土 (灰土? の分層入) | 6 灰黄色土 (SP20層土) | 9 黄褐色土 (SP4層土) |

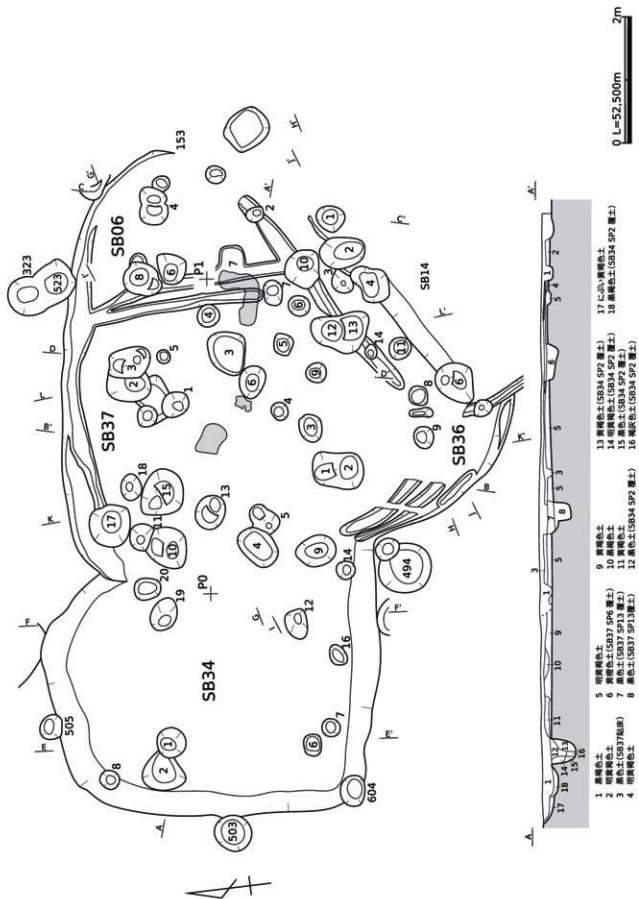


0 L=52,500m 2m

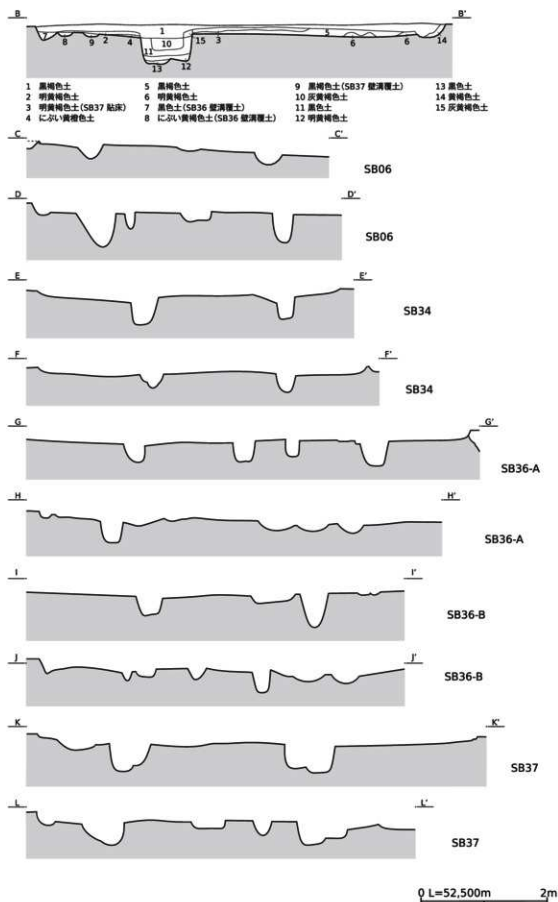


0 L=52,400m 1m

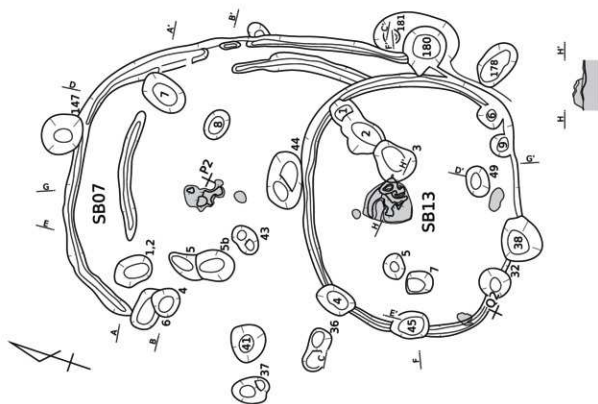
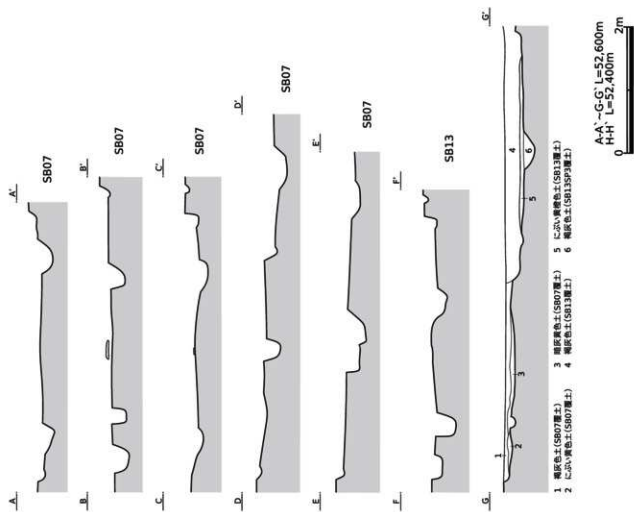
第6図 SB04実測図



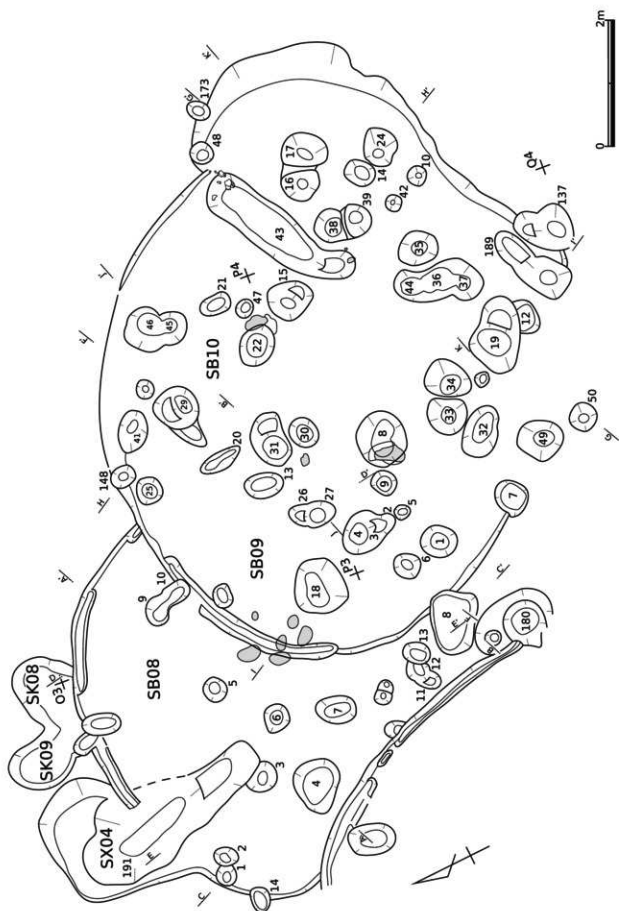
第7図 SB06、34、36、37実測図(1)



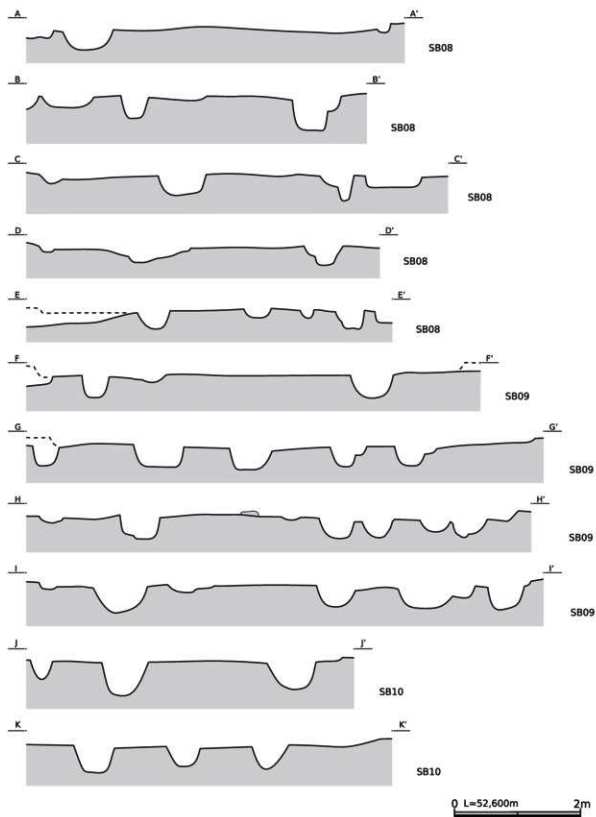
第8図 SB06、34、36、37実測図(2)



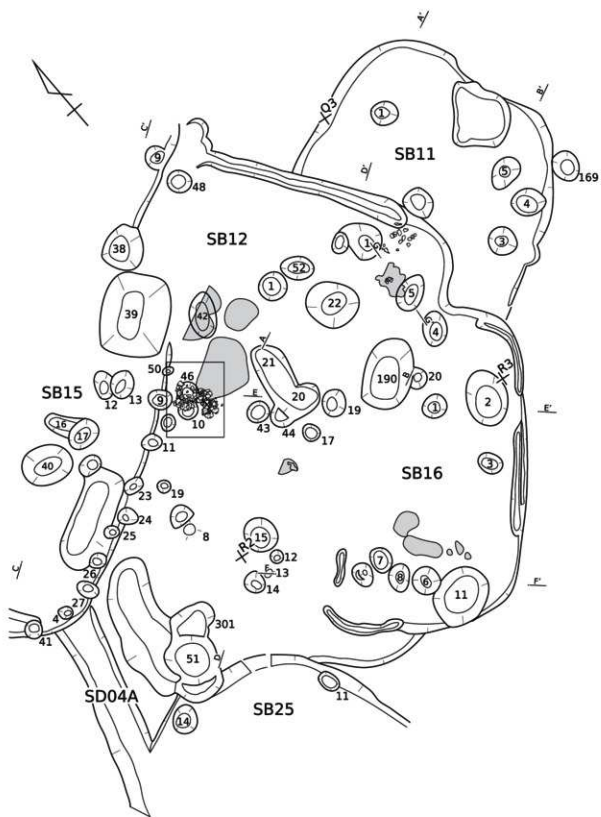
第9図 SB07、13実測図



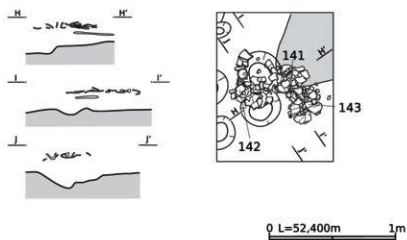
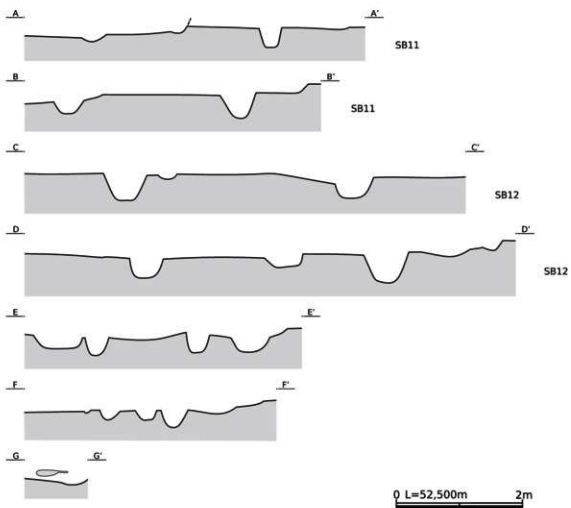
第10图 SB08~10実測图(1)



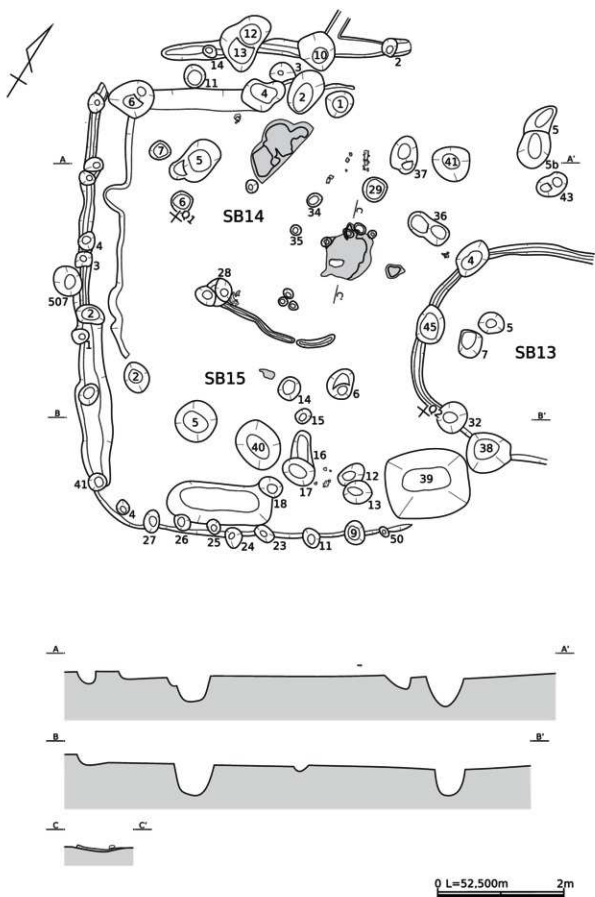
第 11 图 SB08 ~ 10 实测图 (2)



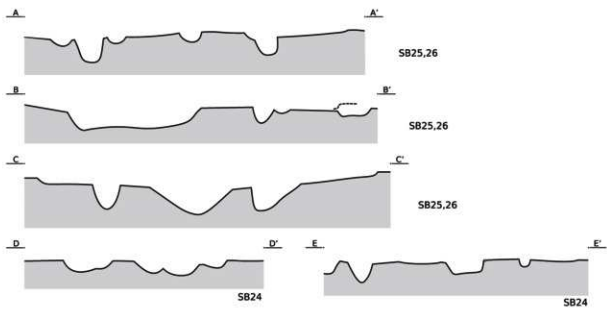
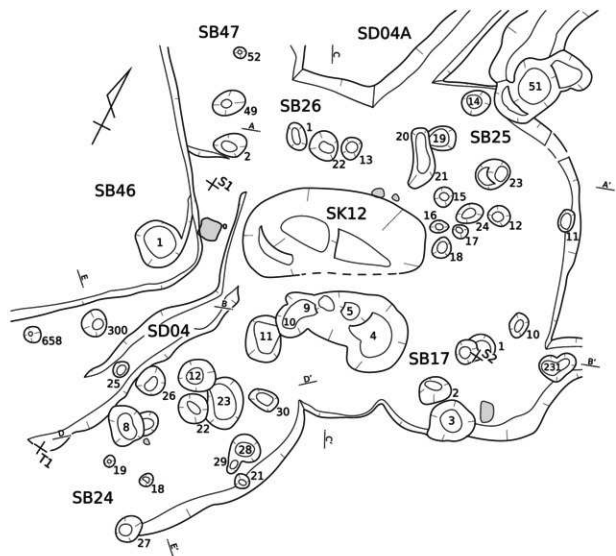
第12图 SB11、12、16 实测图(1)



第 13 图 SB11、12、16 实测图 (2)

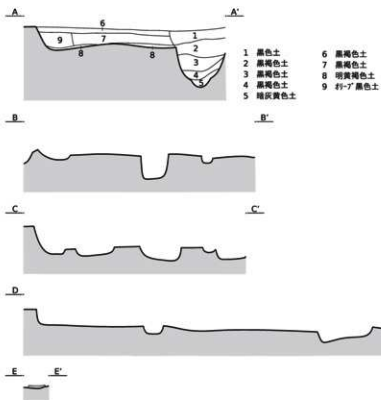
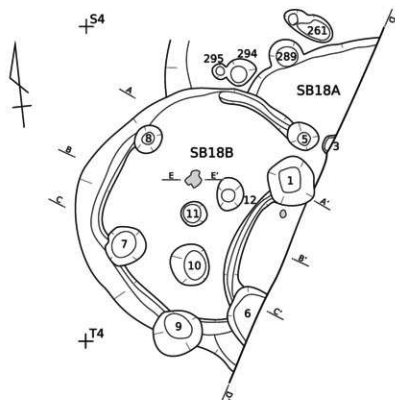


第 14 图 SB14、15 実測図



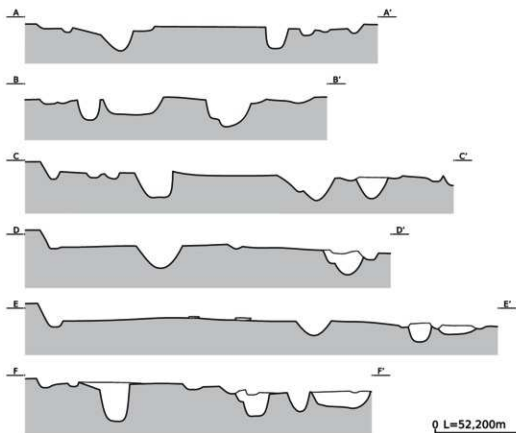
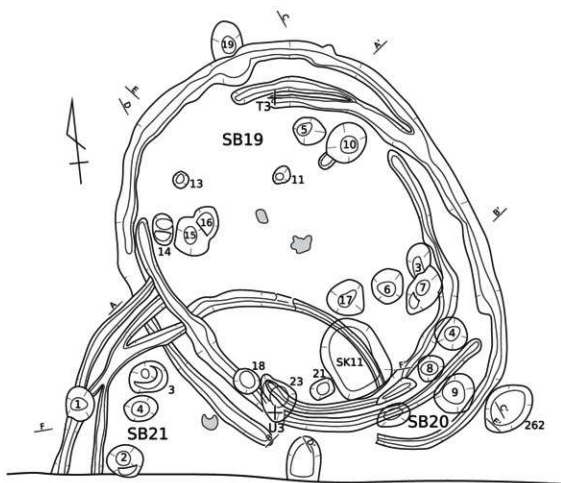
0 L=52,400m 2m

第 15 图 SB17、24 ~ 26 実測図

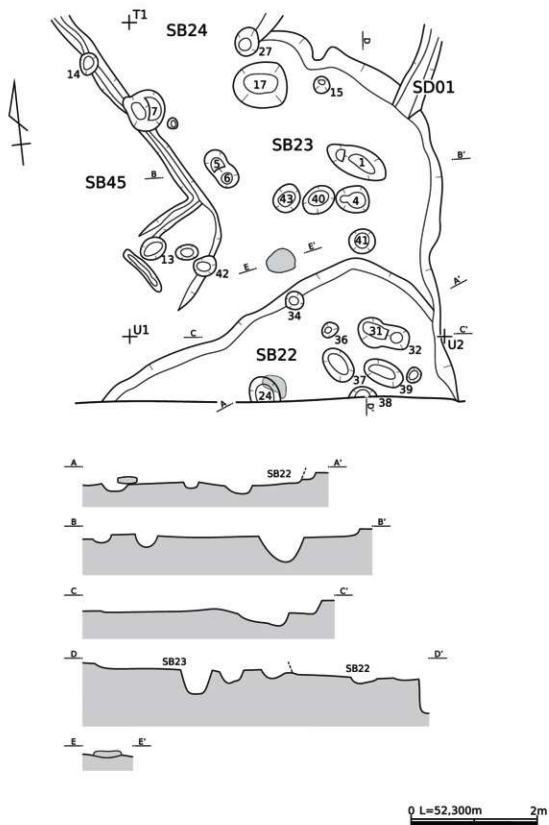


0 L=52,400m 2m

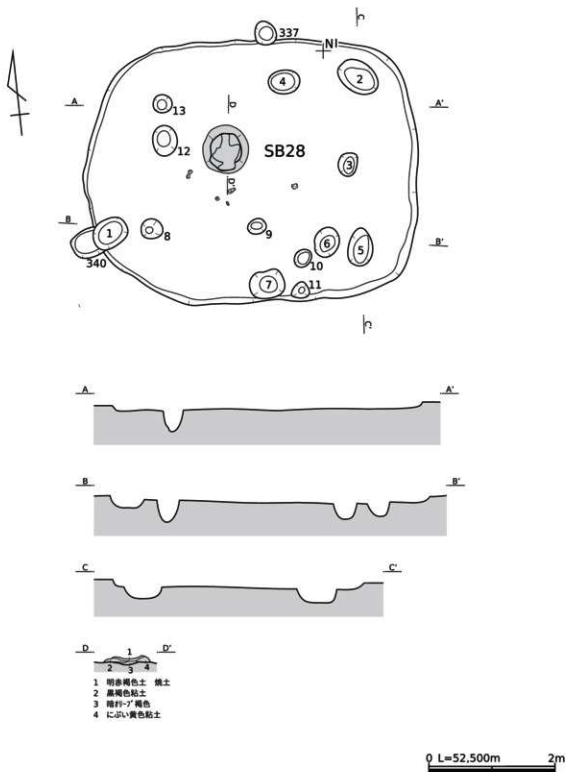
第 16 图 SB18 实测图



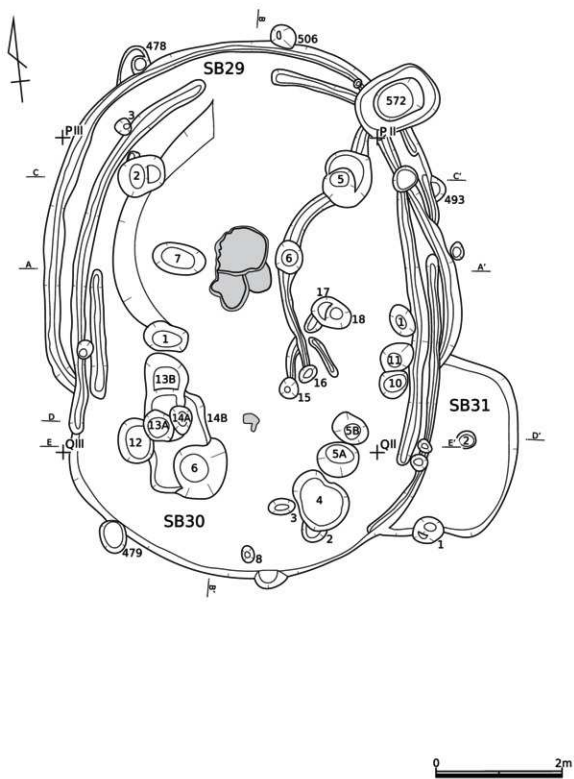
第 17 图 SB19 ~ 21 実測図



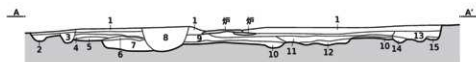
第 18 图 SB22、23 实测图



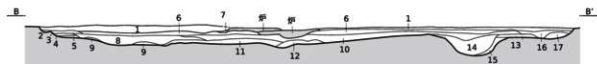
第 19 図 SB28 実測図



第20図 SB29～31 実測図(1)



- | | | |
|-----------|----------|-------------|
| 1 黒褐色土 | 6 灰白色土 | 11 黒褐色土 |
| 2 黒褐色土 | 7 暗褐色土 | 12 黄褐色土 |
| 3 にぶい黄褐色土 | 8 黒褐色土 | 13 褐灰色土 |
| 4 黒褐色土 | 9 黒褐色土 | 14 黒色土 |
| 5 褐灰色土 | 10 暗黄褐色土 | 15 暗赤-ア 褐色土 |

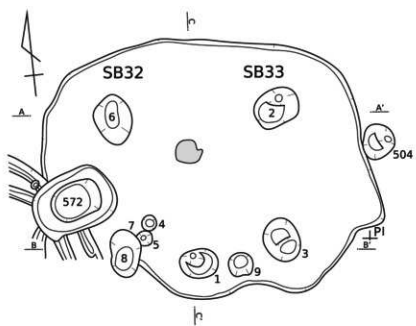


- | | | | |
|-----------|--------|------------|---------|
| 1 黒褐色土 | 6 黒褐色土 | 11 にぶい黄褐色土 | 16 黒色土 |
| 2 にぶい黄褐色土 | 7 黒褐色土 | 12 褐灰色土 | 17 黄褐色土 |
| 3 黒褐色土 | 8 黒褐色土 | 13 黄褐色土 | |
| 4 黒褐色土 | 9 黄褐色土 | 14 暗黄褐色土 | |
| 5 にぶい黄褐色土 | 10 黒色土 | 15 にぶい黄褐色土 | |



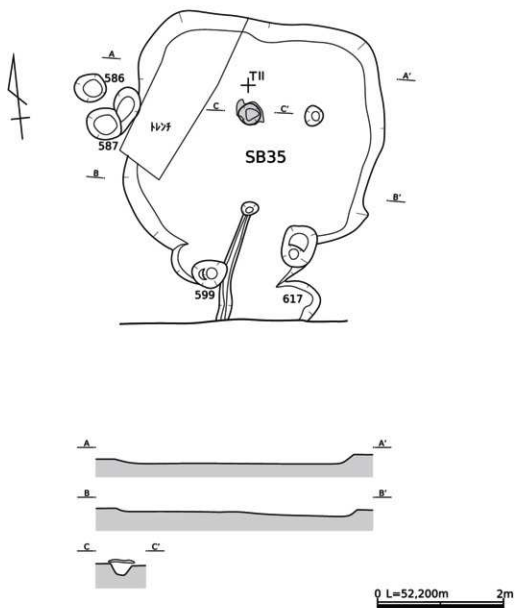
0 L=52,400m 2m

第 21 図 SB29 ~ 31 実測図 (2)

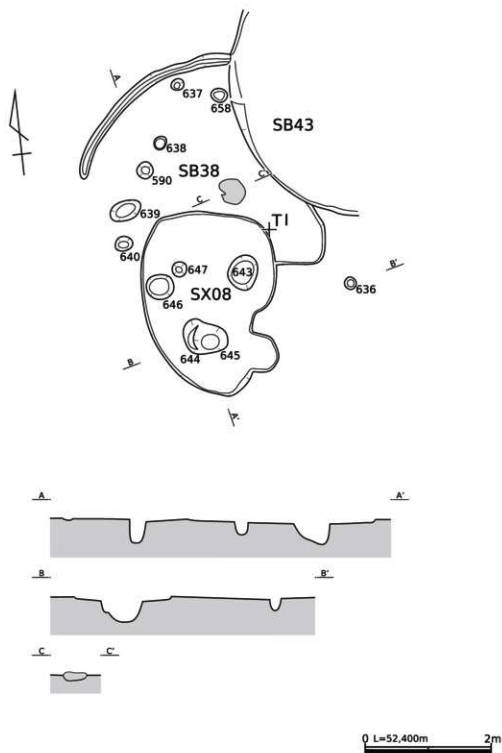


0 L=52.500m 2m

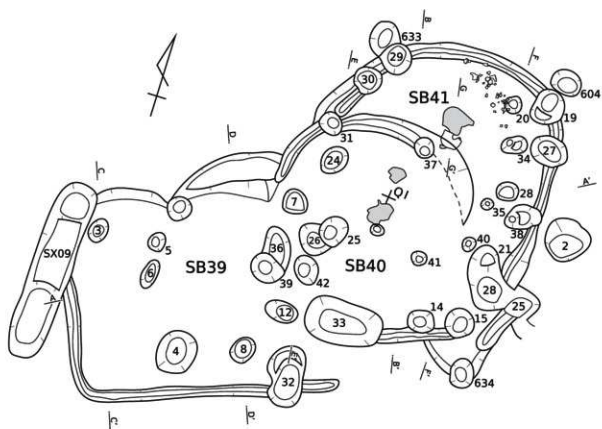
第 22 图 SB32、33 实测图



第23図 SB35実測図



第 24 図 SB38 実測図



- | | | | |
|---------|----------|----------|-----------|
| 1 黒褐色土 | 4 黒色土 | 7 にがい黄色土 | 10 黒褐色土 |
| 2 暗黄褐色土 | 5 黒色土 | 8 黒褐色土 | 11 黒色土 |
| 3 黒色土 | 6 砂-ア褐色土 | 9 黒色土 | 12 砂-ア褐色土 |

B B'



- | | | | |
|--------|--------|----------|--------|
| 1 黒色土 | 3 黒褐色土 | 5 黄褐色土 | 7 黒褐色土 |
| 2 黄褐色土 | 4 黒褐色土 | 6 にがい黄色土 | |

C C'



D D'



E E'

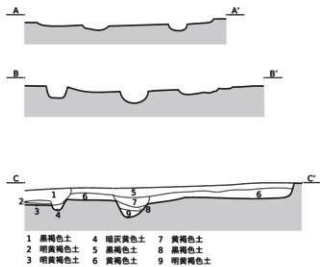
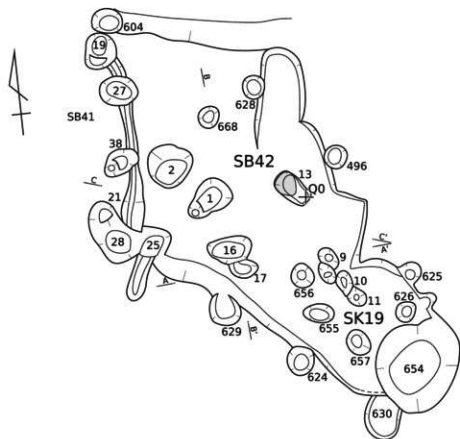


F F'



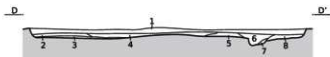
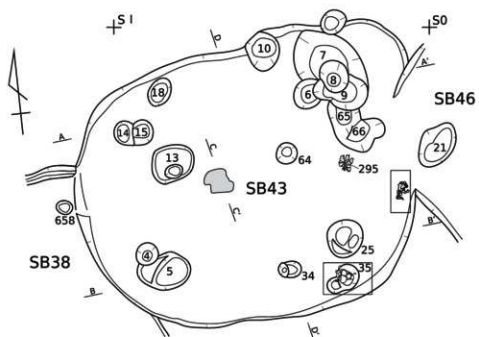
0 L=52,500m 2m

第 25 図 SB39 ~ 41 実測図



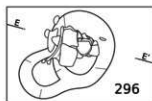
A-A' ~ B-B' L=52,400m
 C-C' L=52,500m
 0 2m

第 26 図 SB42 実測図



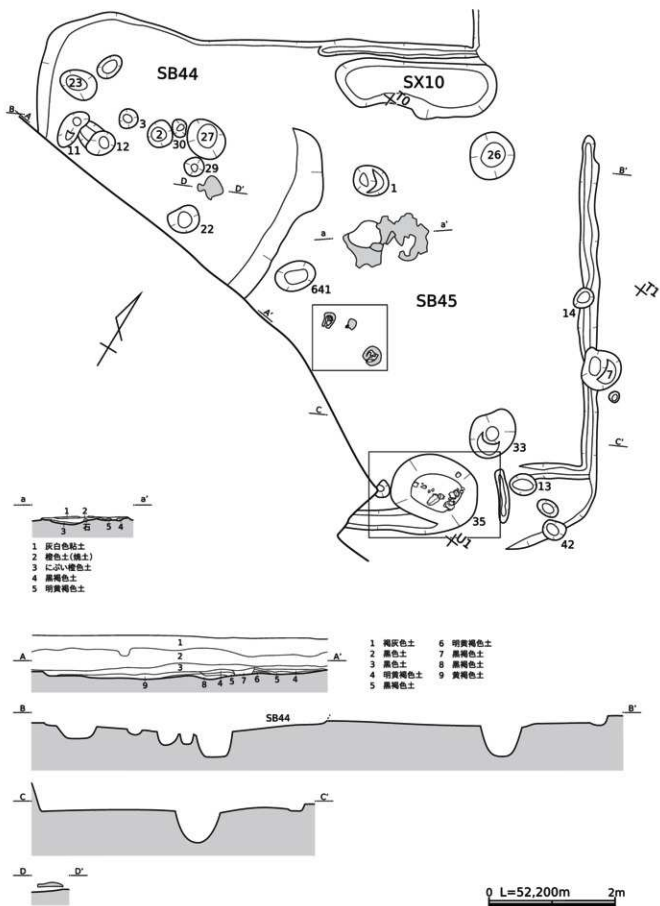
- | | |
|--------|---------|
| 1 黒褐色土 | 5 明黄褐色土 |
| 2 黒褐色土 | 6 黄褐色土 |
| 3 黄褐色土 | 7 黒褐色土 |
| 4 黒褐色土 | 8 黄褐色土 |

0 L=52.400m 2m

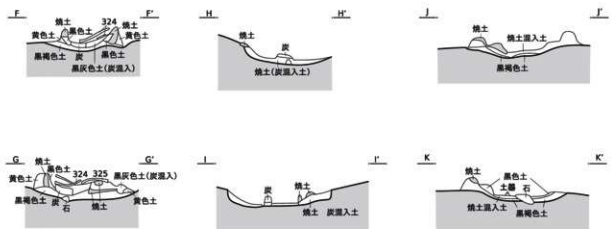
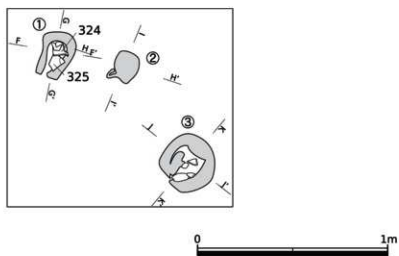
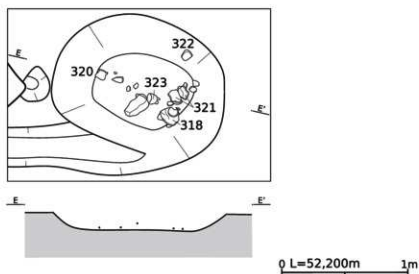


0 L=52.100m 1m

第 27 図 SB43 実測図

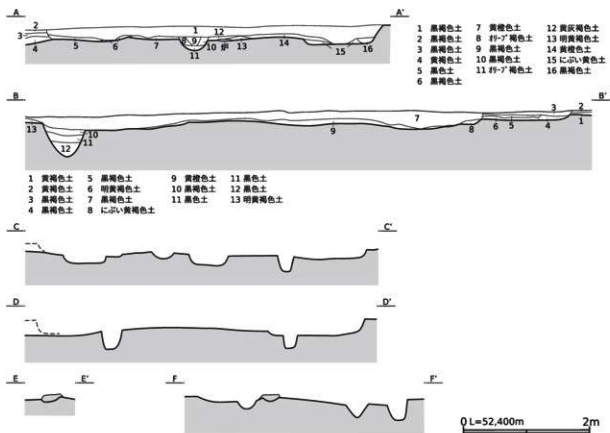
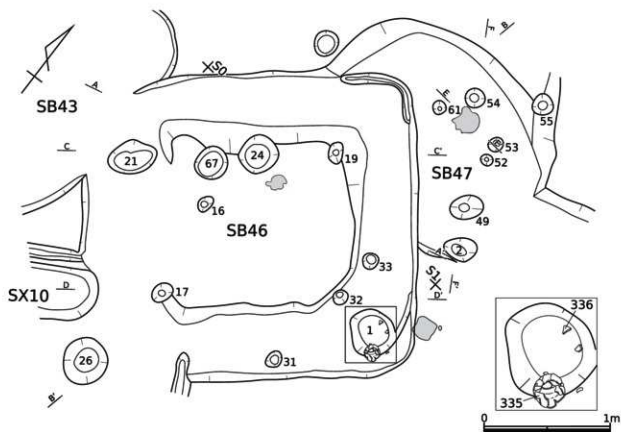


第28图 SB44、45 实测图(1)

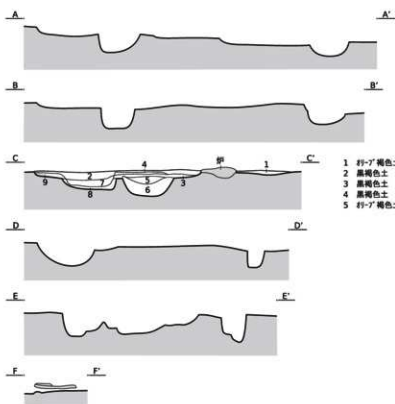
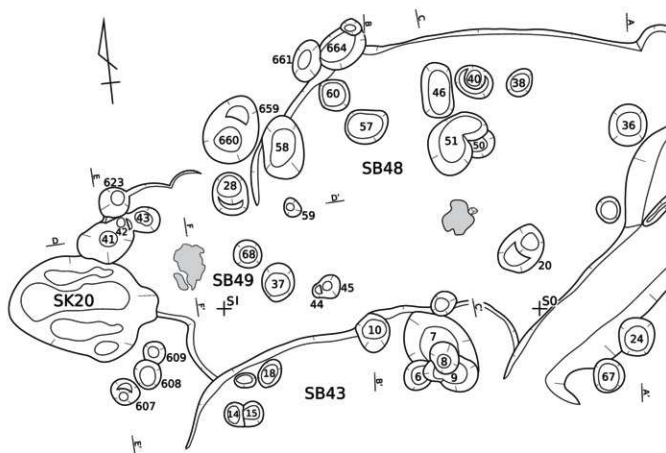


0 L=52,100m 1m

第 29 图 SB44、45 实测图 (2)



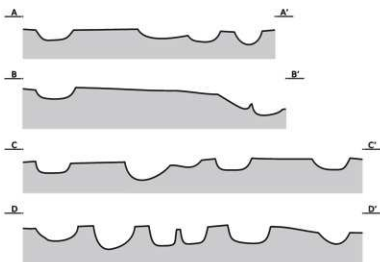
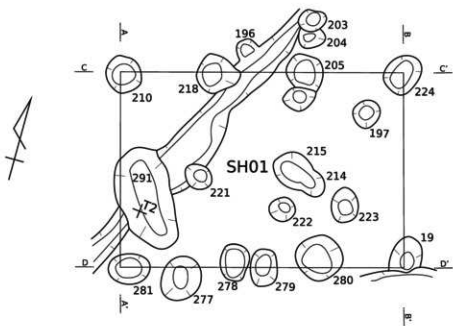
第30図 SB46、47 実測図



- | | |
|----------|-----------|
| 1 行-丁層色土 | 6 に近い黄褐色土 |
| 2 黒褐色土 | 7 黒色土 |
| 3 黄褐色土 | 8 黄褐色土 |
| 4 黒褐色土 | 9 黒色土 |
| 5 行-丁層色土 | |

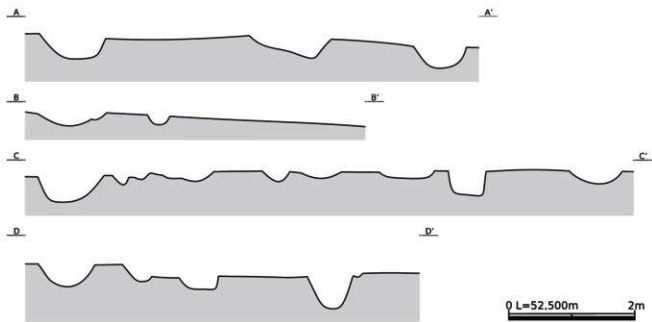
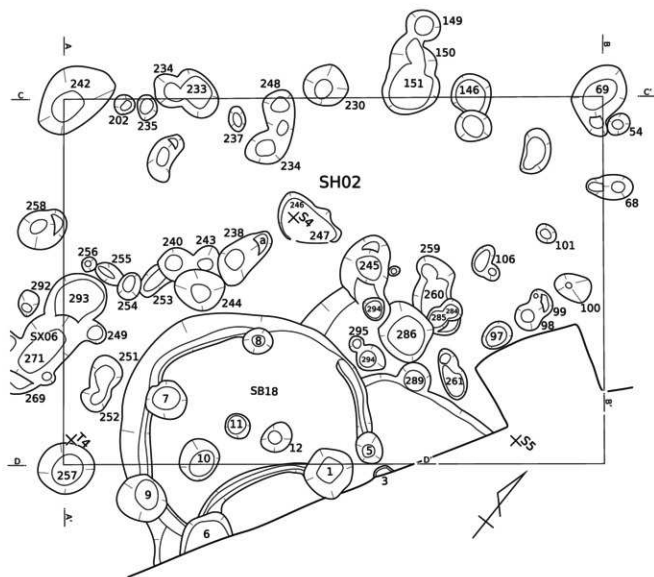
0 L=52.400m 2m

第31図 SB48、49実測図

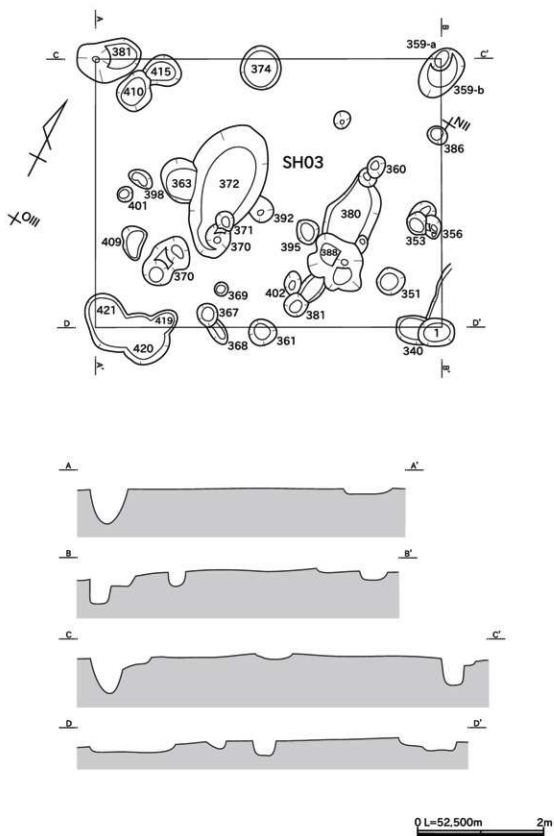


0 L=52,500m 2m

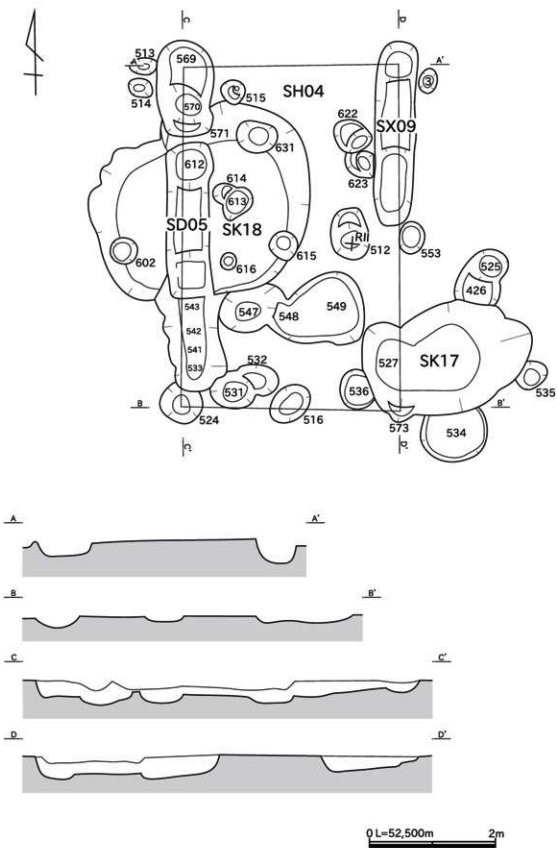
第 32 图 SH01 实测图



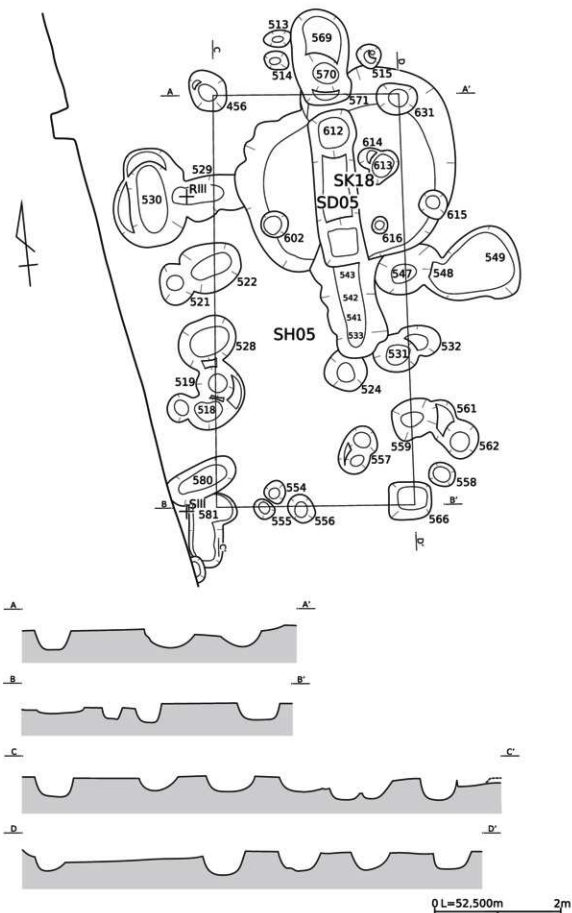
第33図 SH02実測図



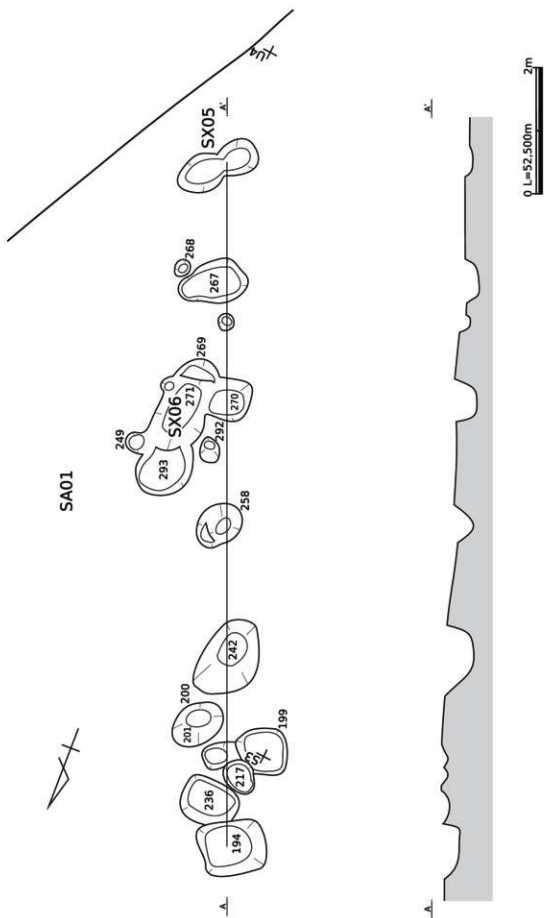
第 34 图 SH03 实测图



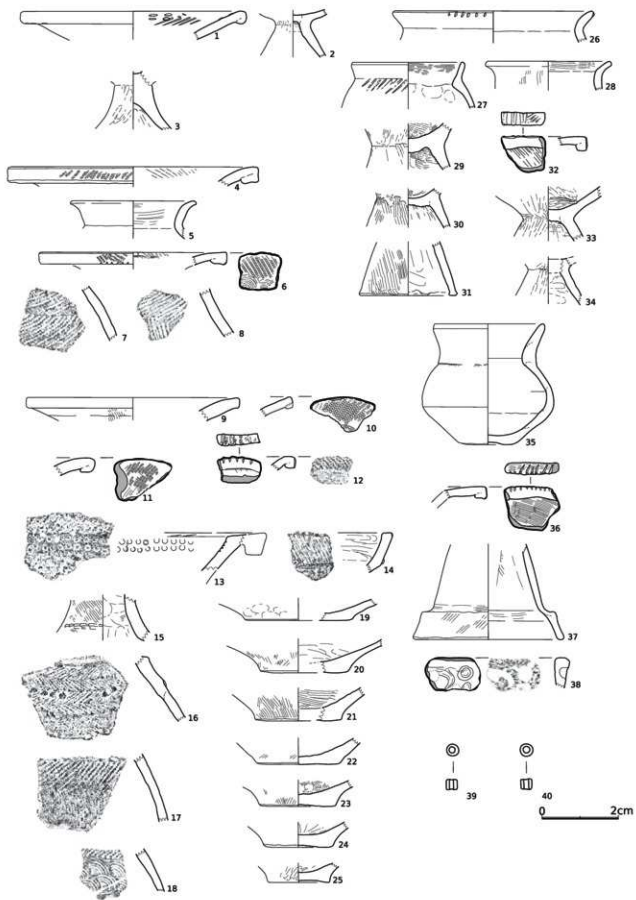
第35図 SH04実測図



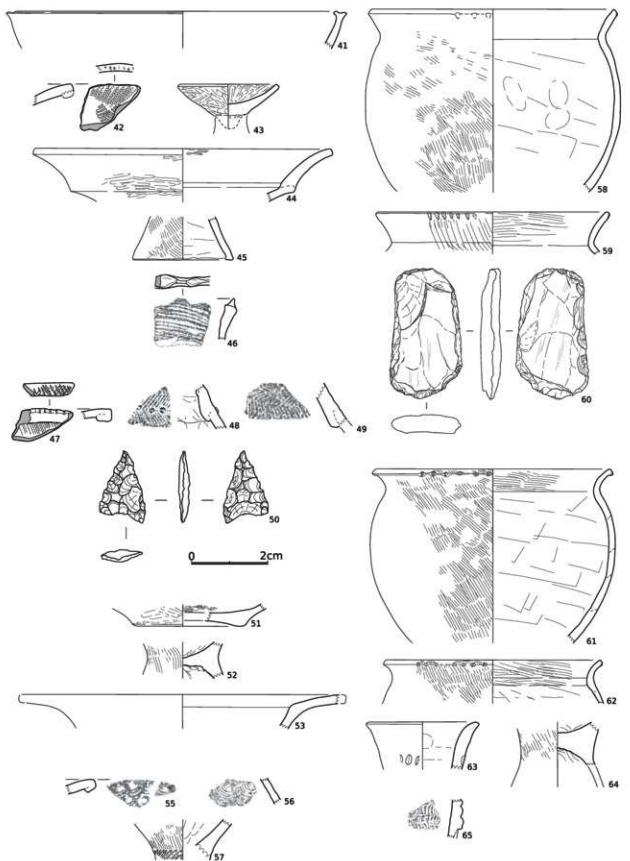
第 36 图 SH05 实测图



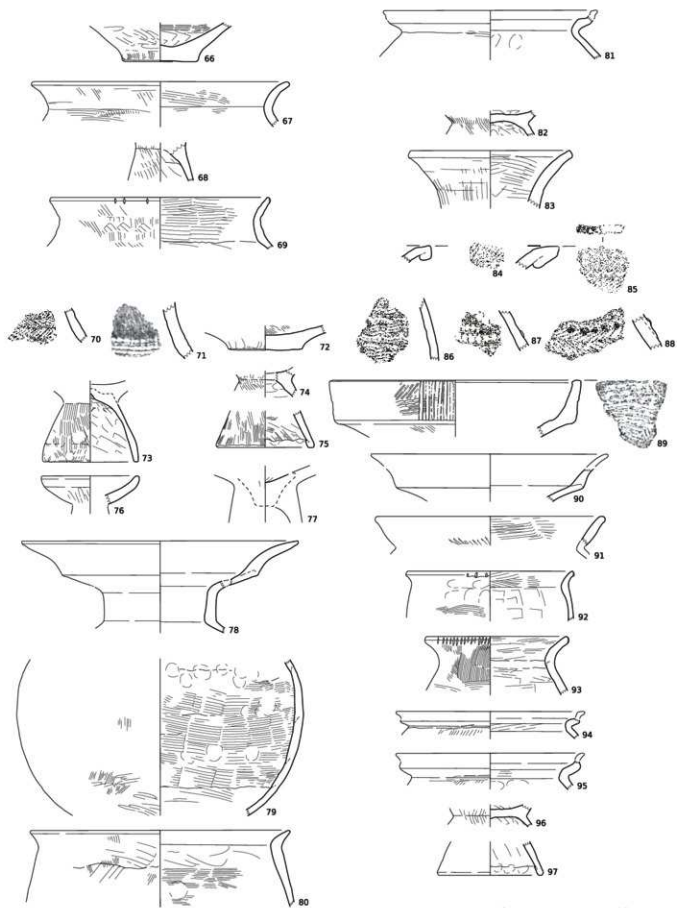
第 37 图 SA01 实测图



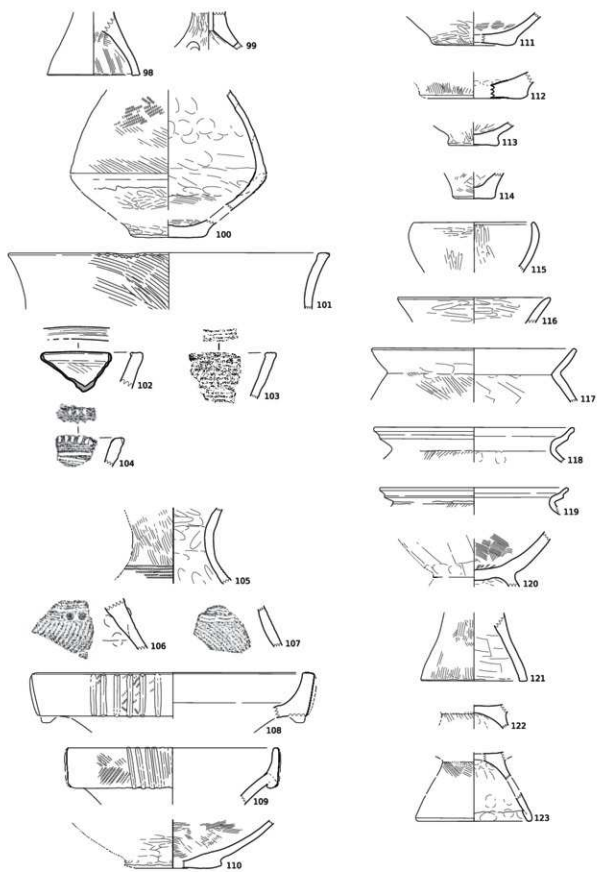
第 38 图 出土遺物実測図 (1)



第39图 出土遺物実測図(2)

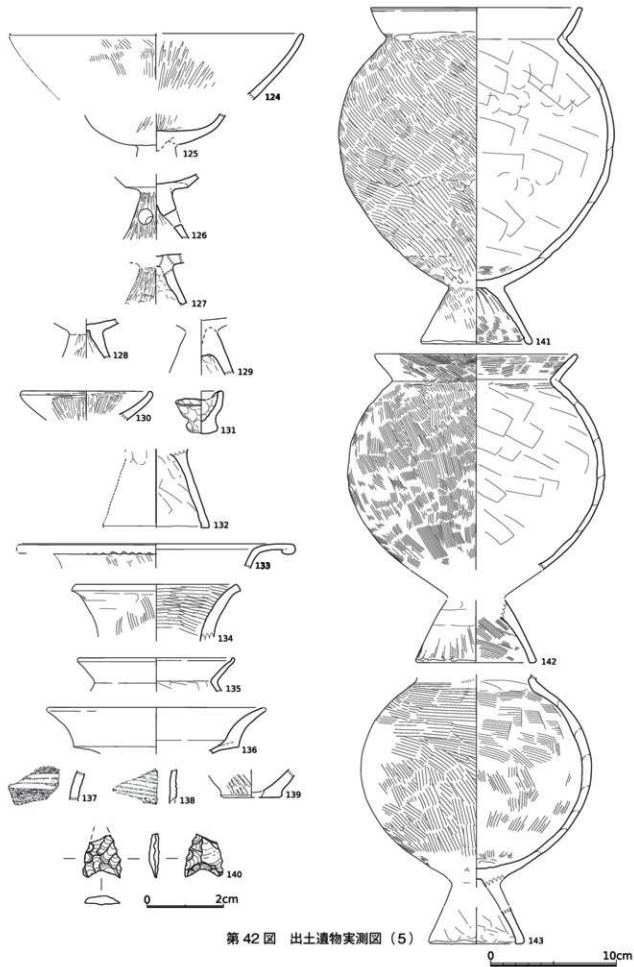


第 40 图 出土遺物実測図 (3)

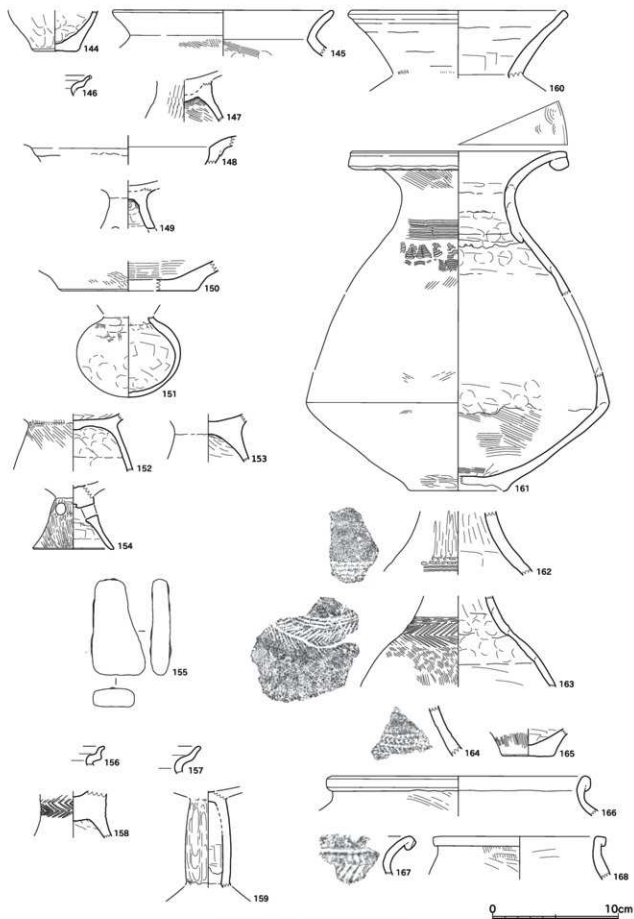


第 41 図 出土遺物実測図 (4)

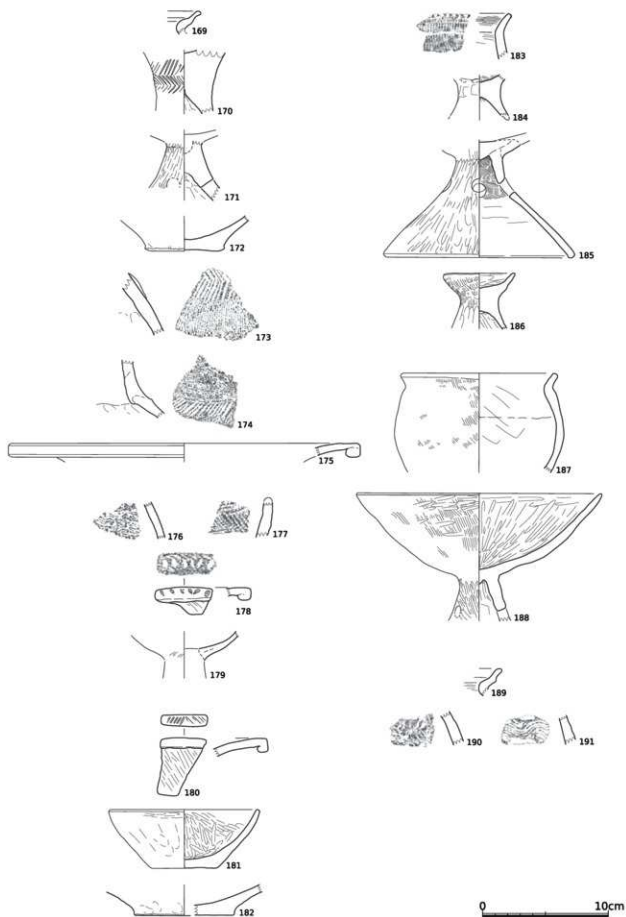
0 10cm



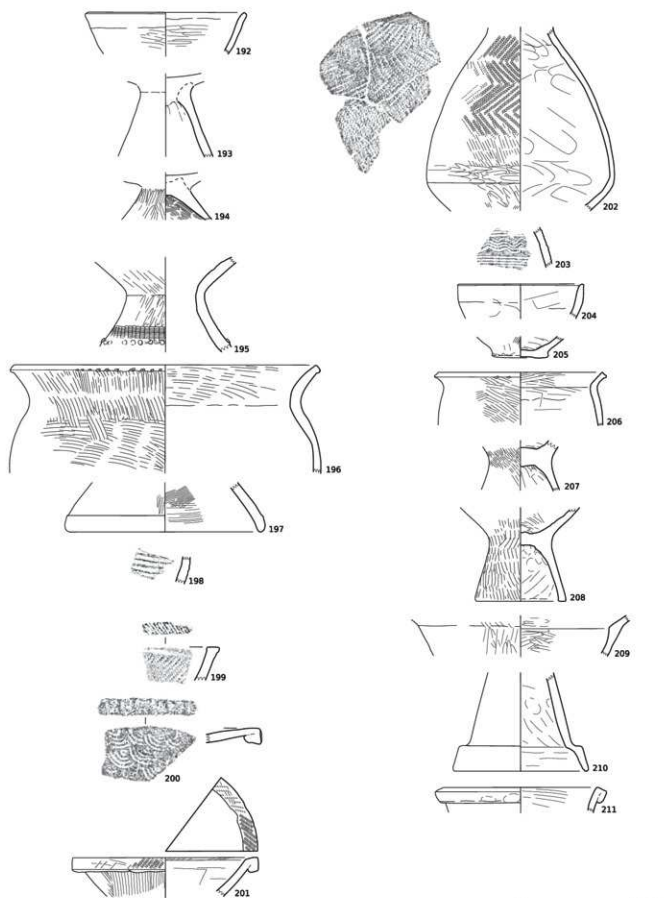
第 42 图 出土遺物実測図 (5)



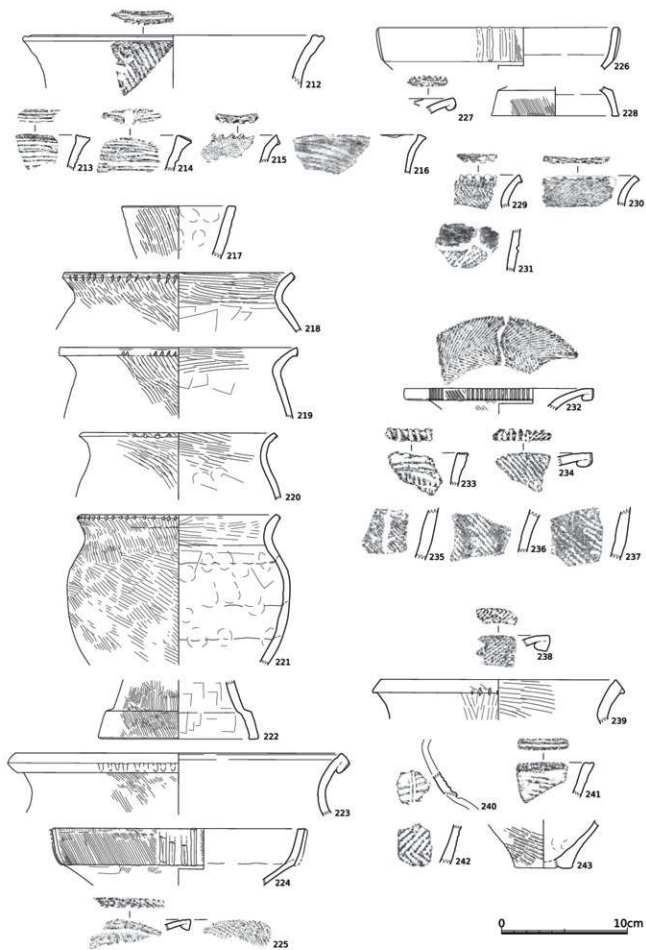
第43图 出土遺物実測図(6)



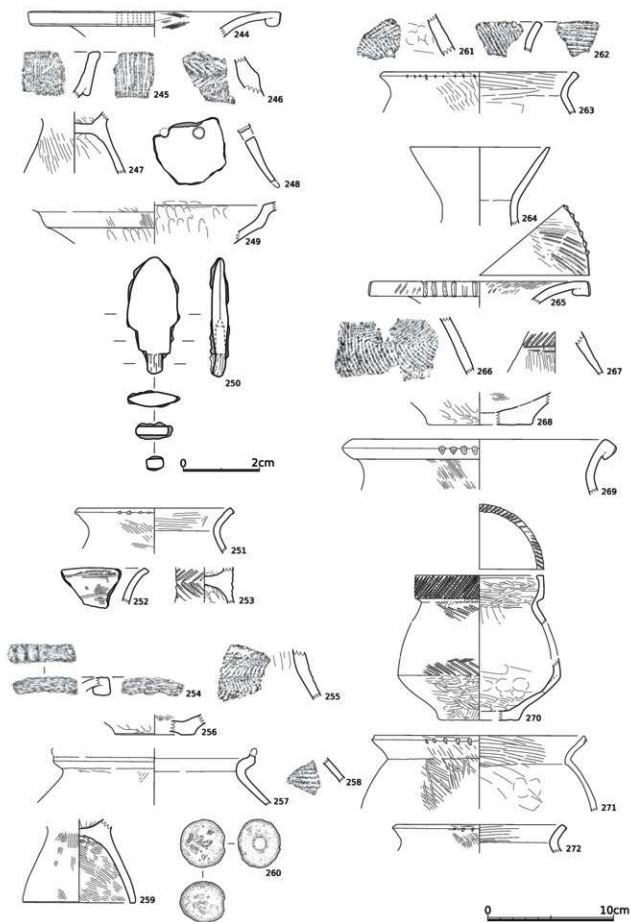
第 44 图 出土遺物実測図 (7)



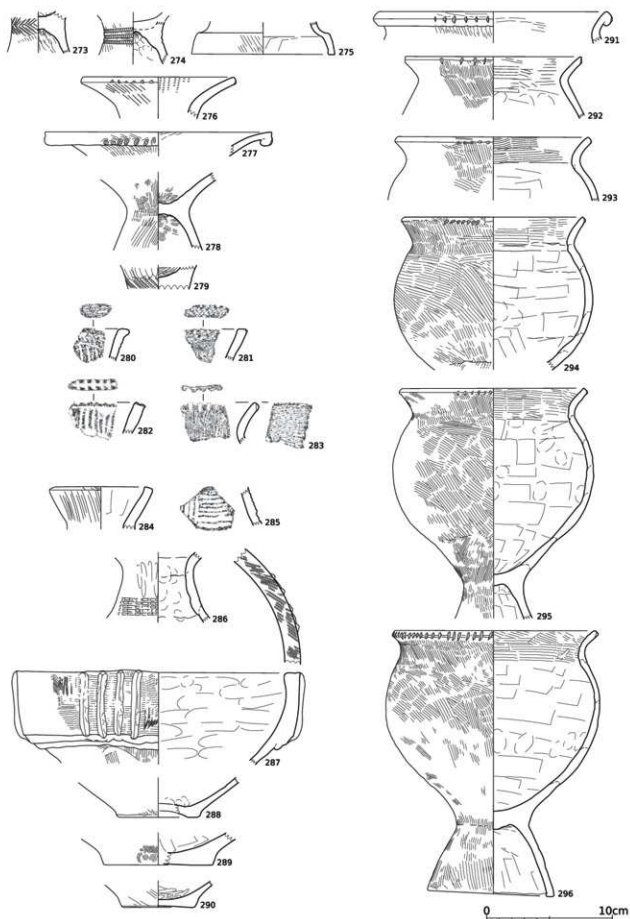
第45図 出土遺物実測図(8)



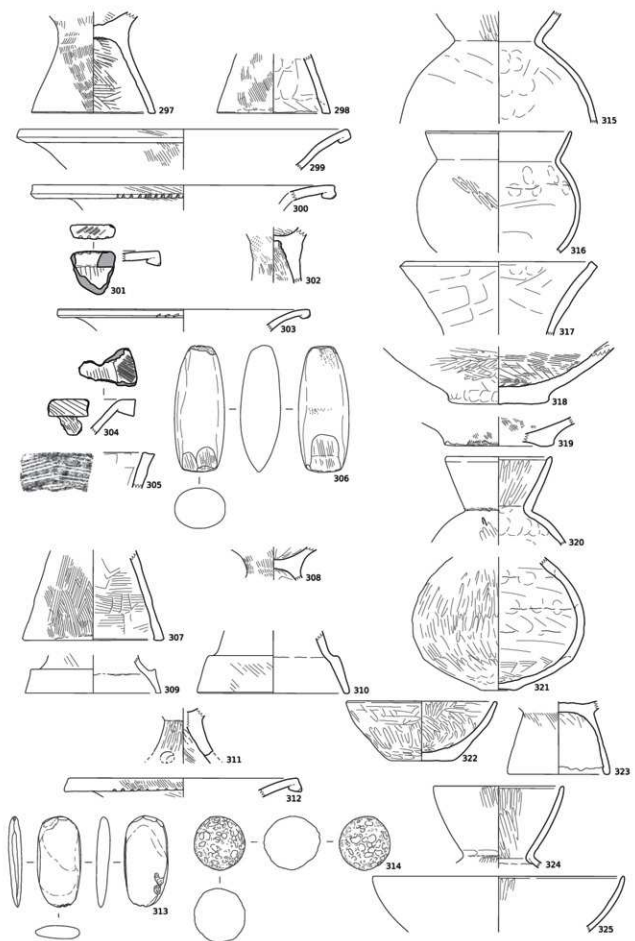
第 46 图 出土遺物実測図 (9)



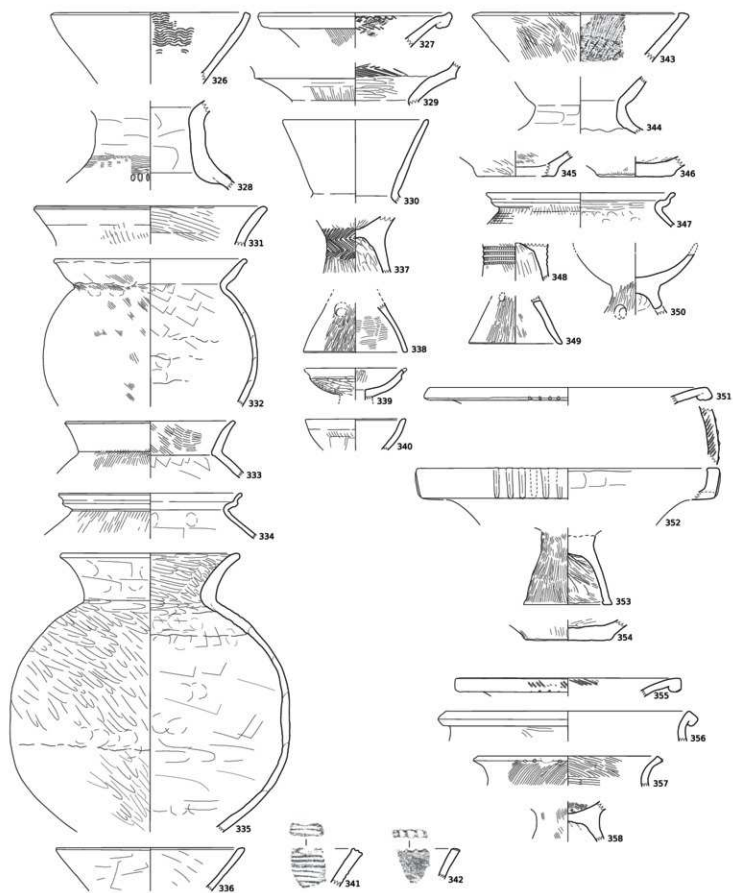
第 47 图 出土遺物実測図 (10)



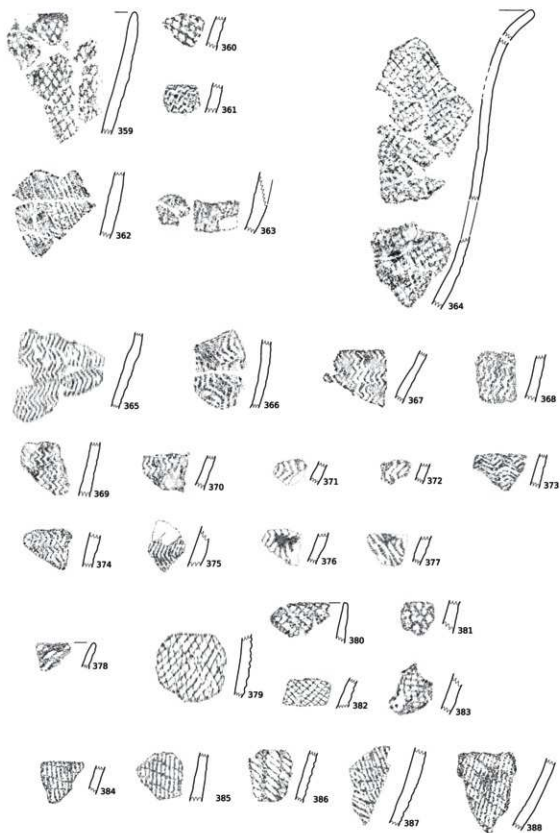
第 48 图 出土遺物実測図 (11)



第 49 图 出土遺物実測図 (12)

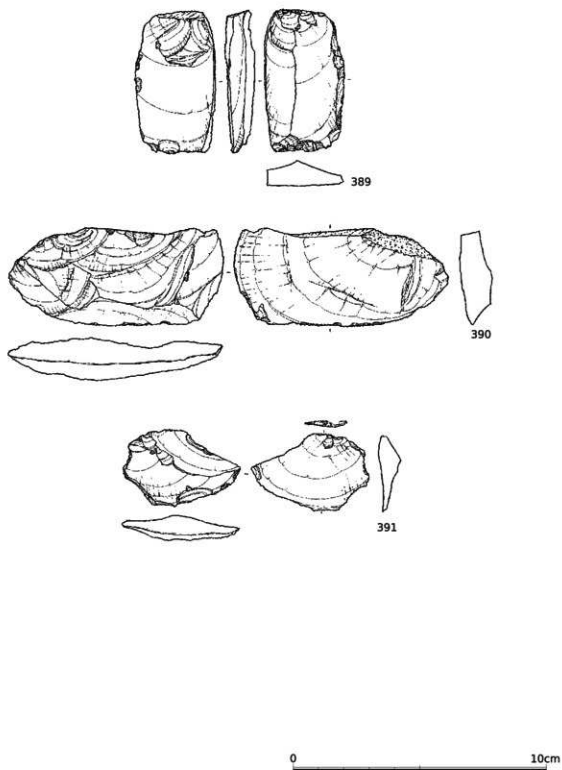


第50图 出土遺物実測図(13)



0 10cm

第 51 图 出土遺物実測図 (14)



第 52 図 出土遺物実測図 (15)

写真図版

カラー図版1



調査区遠景（南から）



調査区遠景（西から）



東側調査区全景（垂直）



東側調査区全景（北から）



西側調査区全景（垂直）



西側調査区全景（北から）



SB01完掘状況（西から）



SB01完掘状況（北から）

図版 2



SB02・03完掘状況（西から）



SB02・03完掘状況（北から）



SB04完掘状況（北から）



SB04完掘状況（西から）

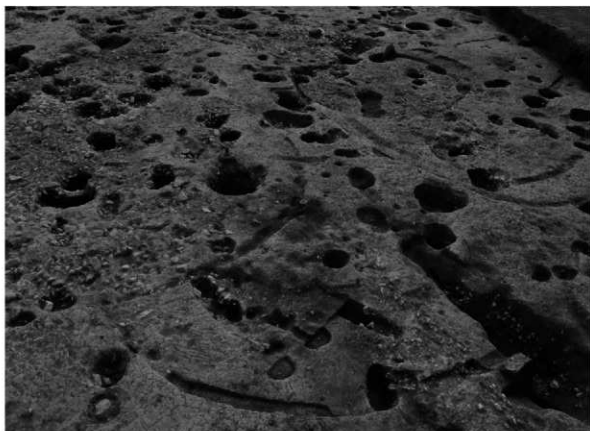
図版 4



SB05東半部完掘状況（東から）



SB05西半部完掘状況（東から）



SB07・08・09完掘状況（北東から）



SB07・13完掘状況（北から）

図版6



SB09・10完掘状況（北から）



SB09・10完掘状況（南東から）



SB11・12・16完掘状況（南東から）



SB12・13・15・16完掘状況（西から）

図版8



SB13・15完掘状況（東から）



SB18完掘状況（北から）



SB19・20・21完掘状況（南から）



SB19・20・21完掘状況（北から）

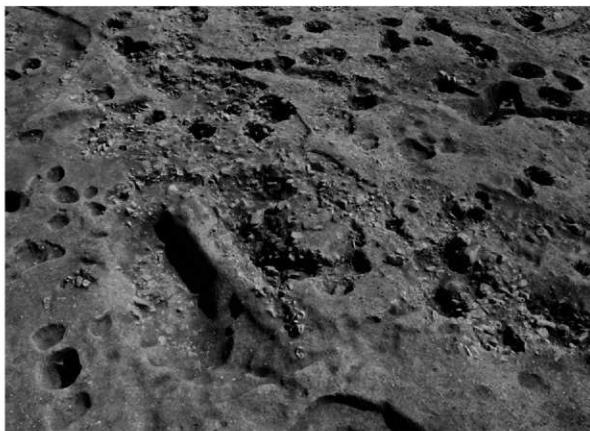
図版10



SB06・14・36・37貼床検出状況（北から）



SB06・14・36・37完掘状況（東から）



SB17・24・35完掘状況（西から）

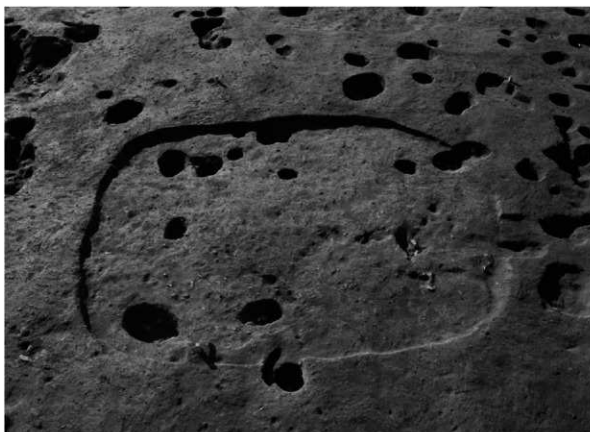


SB22完掘状況（西から）

図版12



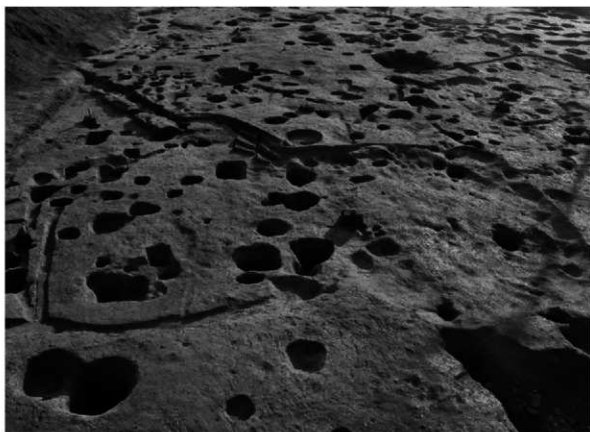
SB28貼床検出状況（西から）



SB28完掘状況（北から）



SB29・30完掘状況（西から）



SB34・36・37完掘状況（北から）

図版14



SB32・33完掘状況（北から）



SB35完掘状況（北から）

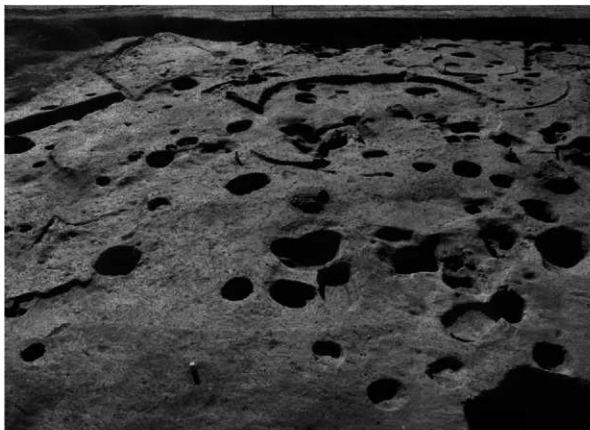


SB39~42完掘状況 (東から)

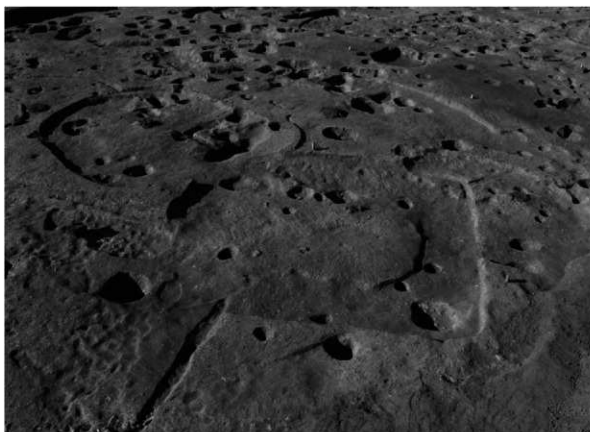


SB43~46完掘状況 (東から)

図版16



SB43・46～48完掘状況（北から）



SB43・46～48完掘状況（南から）

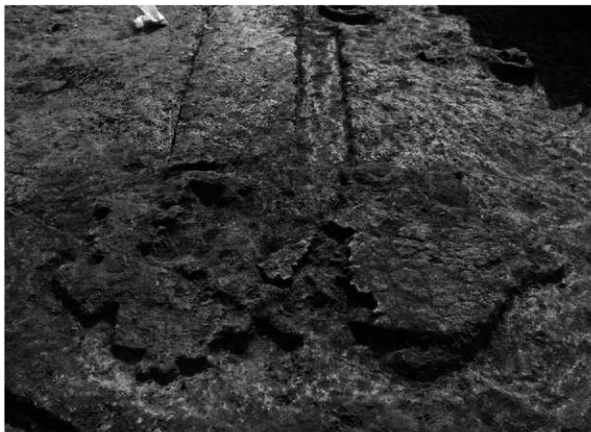


SB34・36・37・42完掘状況（北西から）



SB39・40・41完掘状況（北から）

図版18



SB45炉 (北から)



SB45炉 (西から)



SB46SP1土器出土状態（北から）



SB46SP1土器出土状態（東から）

図版20



SK13土器出土状態（北から）



SK16土器出土状態（北から）



SK15土器出土状態（西から）



SK15土器出土状態（北から）

图版22



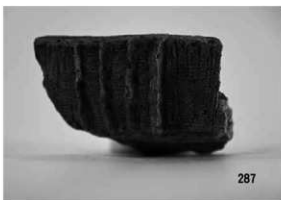


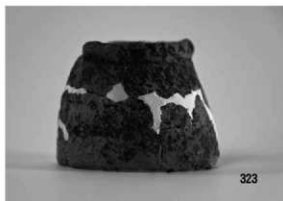
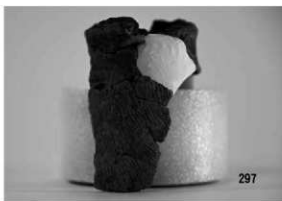
图版24





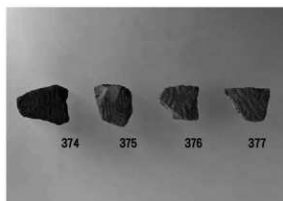
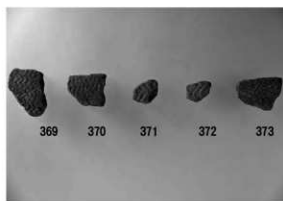
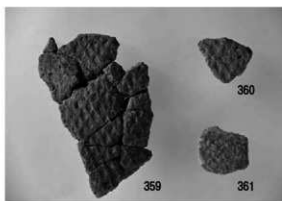
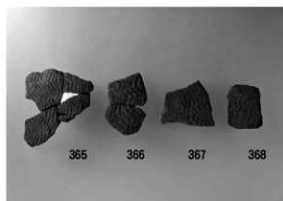
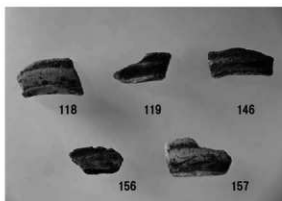
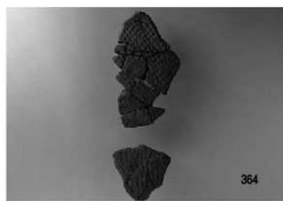
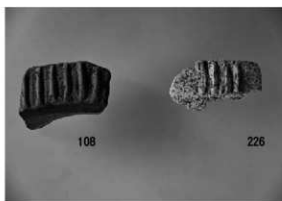
图版26



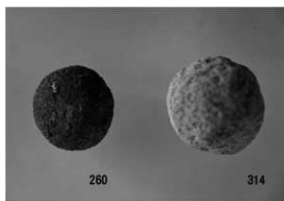
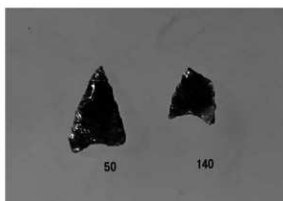
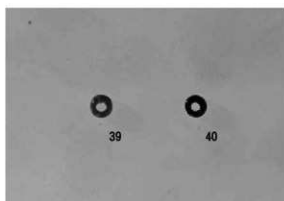
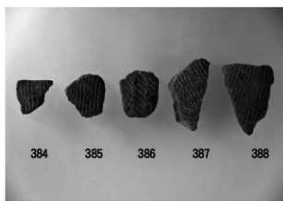
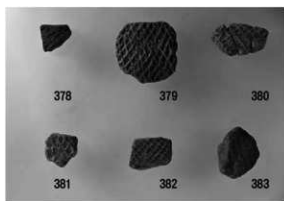


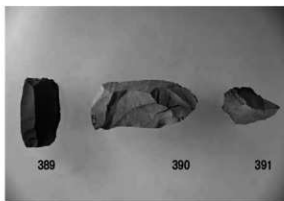
图版28





图版30





報告書抄録

ふりがな	せどやまいちいせきだいはいちじはくつちようさほうこくしよ							
書名	瀬戸山Ⅰ遺跡第8次発掘調査報告書							
編著者名	井村広巳、柴田慎平							
編集機関	掛川市文化・スポーツ振興課							
所在地	〒437-8650 静岡県掛川市長谷一丁目1番地の1 TEL 0537-21-1158							
発行年月日	令和5年3月24日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
瀬戸山Ⅰ遺跡 (第8次)	静岡県掛川市高田	22213	235	34度 47分 24秒	137度 56分 40秒	2020年6月 ～ 2021年1月	1,500㎡	畑地の 造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
瀬戸山Ⅰ遺跡 (第8次)	集落跡	縄文時代早期 縄文時代中期	小穴	土器、石器				
		弥生時代後期 古墳時代前期	竪穴住居跡 掘立柱建物跡、柵列 土坑 小穴	土器、石器、 ガラス小玉				
要約	瀬戸山Ⅰ遺跡は原野谷川右岸に位置する。 縄文時代早期の押型文土器が遺構に伴い、発見された。弥生時代後期、古墳時代前期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑 小穴が発見された。							

瀬戸山Ⅰ遺跡第8次発掘調査報告書

2023年(令和5年)3月24日発行

編集 掛川市文化・スポーツ振興課文化財係
発行 掛川市
〒437-8650
静岡県掛川市長谷一丁目1番地の1
TEL 0537-21-1158

印刷・製本 ㈱幸栄グラフィック
静岡県掛川市弥生町21番地
TEL 0537-24-4341